

オーバーロード～新た
なる六大神～

HONEEEE

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最早テンプレートな、モモンガ様と同時に他のギルドメンバーが転移していたら、というものです。

モモンガと共に巻き込まれた数人のギルドメンバー。力を手に入れた彼らは何を考え、どうするのか。

完全なる初心者ものですが、宜しくお願い致します。

目次

神々の降臨

其の壺	大災厄の魔	1
其の弐	爆撃の翼王	19
其の参	死の支配者	41
其の肆	武の二刀侍	65
其の伍	一騎討ち	86

神々の降臨

其の壺 大災厄の魔

「くっ……」

『彼』は振り向きざま、迫り来る輩に向かつて、掌に現れた紅蓮の炎を投げつける。

自然の法則に反した理を成す炎。虚空から大気で織ったかの様に現れた炎。即ち魔法である。

直線的に飛んで行った炎の球は唸りを上げ、『彼』を殴り飛ばさんと棍棒を構えている者達の、最前列の腐ったような緑色の筋肉塊に着弾。

周りの同種族と思しきモンスター達共々、その命を奪う熱量を維持したまま嘗め尽くす。

刹那、洞窟内に断末魔の絶叫が響き渡る。

「なんなんだよ！お前らは！」

本当に訳が分からない。

発売当初からかなりやりこんだ自信のあるオンラインゲーム、終了間近だから折角と、ギルドマスターの呼びかけに応ようと、久々に顔を出そうとしたらいきなりこれだ。本来ならば所属しているギルドのホームポイントに出現するはずの見慣れた山羊のAvatar。

しかしログイン直後、操作不能のブラックアウトと共に視界に映ったのは、この洞窟の中だった。

確かに今までもいろいろとミスが多いゲーム運営で、サービス開始当初からプレイヤーに散々叩かれてはいたが、運営に直接連絡を取れるGMコールは使えない、その他操作を行うコンソールも開かないとなると、ネットワーク上の拉致と取られても可笑しくはなく、一企業として裁判どころの話だ。

——ただこれだけは運営の所為とは言い切れまい。『五感が働く』。

これはゲーム「YUGGDRASIL」において、いや全てのDMMO—RPGを縛る、電脳法と呼ばれる法律によって排除されている。視覚、聴覚だけならば問題ないが、ファイアーボール「火球」による熱、足に伝わってくる地面の感触は確実にアウト——法律違反だ。

現在の技術形体ならば五感の再現は不可能ではないだろうが、そもその話、【YUG D R A S I L】では味覚と触覚は取り入れられていない。これが最先端技術を使ったアツプデートでなければ。

従って『その男』——ウルベルト・アレイン・オードルは、現状をこう判断した。

異世界転移、と。

我ながら聞いて馬鹿々々しいと思うが、それしか有り得ないのだ。頭が納得を拒否していても、既に心は認めている。

感じるのだ。

己に備わるMPの総量、魔法発動による冷却時間リキヤストタイム、発動している特殊技術スキルの効果。

現に現実世界リアルには存在し得なかった、それらをまるで我が物として振るえているのだから、もはや言い訳の余地はあるまい。

「クラエツ!!」

洞窟を震わす濁声と共に、己の脳天へと振り下ろされた一撃——それを超越した反射

神経でヒョイと躲すと、反撃とばかりに無詠唱化した〈魔法最強化・火球〉を叩き込む。

ここ数分間ずっとこれの繰り返しだ。

そもそも、初めにコンタクトを図ろうとしたのが間違いだった。

汚い大音声で「モンスター！ テキ！」などと叫ばれたから、この洞窟内の全ての仲間たちが集合したのだろう。

ノコノコと逃げ回っている内に、追いかけて来るモンスターの数は優に50を超えている。構成の大部分は人食い大鬼だが、中には自己再生能力を持つ妖巨人の姿も見える。

(まあ、俺の敵にはなり得ないけどな……)

100レベルプレイヤーであるウルベルトにとって、変異個体でもない妖巨人程度なら数百匹単位でかかってきても数秒で容易く殲滅できる。

では何故今この状況でそうしないのか。

答えは簡単だ。

自分まで巻き添えになりたくないからである。

ユグドラシル内において、魔力系魔法詠唱者では最高の攻撃力を誇る《世界災厄》の職業に就く彼からしてみれば、この程度のモンスターが幾等集まったとしても話にもな

らない雑魚共だ。

しかし、だ。

今こうして〈火球〉を放つて分かるように、この世界では【YUGGDRASIL】の魔法は世界の法則——出現の仕方などを除き——に則り顕現する。

要はゲームのエフェクトがそのまま現実世界の現象として置き換えられる、という事だ。

そのため、下手に十位階魔法〈隕石落下〉などを唱えたら、星もろとも吹っ飛ぶ可能性がある。——同様に、使用する魔法の采配を間違えると、自分が洞窟に生き埋めにされる恐れがあった。

ただでさえ純粋な攻撃特化型魔法詠唱者で、広範囲&攻撃強化系統の常時発動型特殊技術を多数取得しているため、より弱い魔法を使わなくてはならないのだ。

（圧倒的火力による多数殲滅系の魔法ばかりとっていたからな……。妖巨人^{トロール}って確か、炎と酸系攻撃以外の高速治癒だったよな……。：試してみるか。）

終わりの見えない鬼ごっこに終止符を打たんと、意を決したウルベルトは後ろを振り返り、高らかに詠唱する。

「魔法二重効果範囲拡大最強化・超酸の霧」！

唱えたのはウルベルトが覚えている中で酸系統の中では最強の、第十位階魔法。強烈な酸によるダメージで、対象及び若干だがその武器にも損害を与える魔法だ。

ウルベルトの伸ばした手、それぞれの延長線上で、黄緑のもやが噴出した。生み出された、鋼鉄をも溶かす酸の霧は、全身から蒸気と悲鳴を上げながら逃げ惑うモンスターの群れを、嬉々としてその体に飲み込む。狭い洞窟の中、逃げようと必死に足掻くモンスター達。しかし自由に形を変える霧に対して巨体が身を隠す場所などあるはずなく、その場が静寂に支配されるには2分とかからなかった。

暗くジメツとした空間に残るのは、酸っぱい匂いとかつてモンスターだった、謎のふやけたものだ。

「… 本当に低レベルの雑魚だったって訳か。ともあれ綺麗になつてよかった」

未だにゲームの世界であることを諦めきれしていないせいとか、どことなく浮ついた気持ちで、次取るべき行動を考える。たったあれだけの魔法で、この広い洞窟全てのモンスターが駆除できたとは思えない。

「となると、次はこっから脱出が…」

（上に穴を掘るか？…下手したら土が降ってくるよな…）

悩むウルベルトにYUGGRASIL時代の思い出が蘇ってくる。

「〈次元の転移〉」

タン、と軽やかに地上に降り立つ。と、同時に無詠唱化した〈飛行〉^{フライ}を唱え、即座の逃走を可能にしてから素早く周囲を見回す。

「敵…は居る筈もないか…。」

突拍子もないことに巻き込まれた挙句、約2年近くものブランクを経てなお転移後の対PK動作が染み着いている自分に苦笑する。とはいえ何度もこれに救われて来たのも事実だ。

モンスターとの戦闘で張り巡らせていた緊張が解け、警戒が薄れていくと共に、己の常識から逸した周りの状況とそれに追隨する興奮がじわじわと頭に入ってくる。

「これは……。」

辺り一面、ウルベルトの周りを覆うのは、様々なグラデーシヨンの緑だった。頭上から差し込む木漏れ日とどこまでも続いて行きそうな深い森が、飲み込まれそうな異様な圧迫感となり、その身を包む。

「すげえ……。」

何とも乏しい感想だが、それだけの驚きを感じていたのだ。こんな場所は現実世界^{リアル}ではお目にかかる事は不可能と言って差し支えない。もしこれらの植物を持つて行つたなら、かなりの額にはなる筈だ。

(まあ、だからこそ異世界つてやつ証明にもなるんだがな…。)

改めて現状を突き付けられ、ウルベルトは少し肩を落とす。が、ここでじつとしてい
るわけにも行かない。

何か行動を起こさねば。

現実世界リアリティに戻る方法を探すのか。

この未開の地で暮らして行くのか。

それとも…

(……冒険、か。ユグドラシルの真似事も悪くは無い…。)

元の世界にも別段心残りがある訳でもない。寧ろほぼ全ての事柄に置いて、こちらの
世界の方が魅力的だ。

それに維持する指輪リング・オブ・サステナンスやら呼吸不要のアイテムやらを使えば、海底はおろか宇宙まで
も行けるかもしれない。

(ユグドラシルと言えば、他のメンバーも居るかもしれないな…。タイミング的にモモ
ンガさんとかが居そうだな。そうと決まれば！)

〔次元の転移〕

~~~~~

再び視界が開ければそこは、無限、と言って差し支えない程に開けた若草色の大地だった。吹き付ける風がとても心地良い。

(凄え……んな草原、記録にも無いよな……)

その場で回転するように、ぐるっと辺りを見渡す。すぐ後ろに見える鬱蒼とした森は、先程自身自身が居たもので間違いはないだろう。

ならば、転移は成功。

さつきから何かと魔法を使っていて、少々怠いような感覚がある。恐らくこれがMP消費、と言う奴なのだろう。とは言っても集中してやつと分かる、という微妙たるものなのだ。

次は生活の基、衣食住の確保。

(こーやって順序立てて行くことがサバイバルでは必須、だったよな。ブルー・プラネット。)

あの時、高給取りの趣味は関係ないと笑い飛ばしながらも、陰で耳をそばだてていた甲斐があつたと一人微笑う。

衣装、もとい装備はアイテムボックスに大量に保存されていたものを確認済みだ。

因みにアイテムボックスは、妖<sup>トロール</sup>巨人たちとどんちゃん騒ぎをしている内に偶然発見で

きた。こればかりはあのモンスター共に感謝だ。

そして食料。これは先程も言ったように維持する指輪で代用が利く。

どうしても何か口にしたくなつた時は巻物にそういった物があるはずだ。

何かを狩る、というのも新鮮でいいかも知れない。技術の有無はこの際おいておく。  
最後。

(問題は住むところなんだよなあ…)

家の材料になりそうなものなど、周りには木や草しか無い。そんな状況で、建築などかじつた事も無い者が家など作れるはずも無く。

しかしこの世界は現実世界と違って、理不尽なことを可能とする法則が支配している。

(魔法…魔法か。本当に何でもありだよなあ…。魔法詠唱者で良かったよ、マジで…。)

そこでふと思う。

(戦士職…たっち・みーだつたらどうするんだ？こつちに居る可能性だつてあるんだよな…。まあ居ないだろうけど…巻物溜め込んでたし大丈夫か。)

何かにかけては対立していた旧友に思いを馳せる。少し位心配してやってもバチは当たらないだろう。

そんな事を考えながら、アイテムボックスから百科事典エンサイクロペディアを取り出し、「魔法」の欄を探す。

百科事典は、所持者がこれまで出会って来たアイテム、モンスター、魔法などが自動的に記録されていく、所謂便利グッズと言うやつだ。

しかし自動で記録されるものはあくまで名称に過ぎず、その詳細は自分で書き込まなければならぬ。

外表紙はかなり古臭いが、開いてみるとかなり良質の真新しい紙であることが分かる。そんな中にはびっしりと細かい文字が詰め込まれていた。敵に関する情報という点では、ウルベルトは意外に几帳面なのだ。

そのままペラペラと捲って行くと、とあるページでウルベルトの手が止まり、その目が妖しく光る。

「これだ。大きき的にもここで良いな…。」

ニヤリという笑みを浮かべたまま、ウルベルトは指揮者コンダクターさながらに、優雅な動きでその腕を振る。

「〈重要塞建設〉」

第十位階の魔法発動と共に激しい地響きが起こる。通常の間人なら立っていられないレベルだが、高位のマジックアイテムで身を包んでいるウルベルトには関係ない。

そんな中ゆっくりと姿を現したのは漆黒の要塞だ。何人たりとも動かす事ができないオーラを放っているその姿は、まさに魔王の城と言うに相応しい物だった。

威風堂々と——少し禍々しいが——したその建物は、その全貌を見せると主であるウルベルトを歓迎するかの様に、重々しく門を開く。

ゲームとは比べるべくも無い。リアルの感触にただ圧倒されていたウルベルトだが、一拍の後に我に帰る。

「ハハハ、これは凄い。」

黄昏の光に何を思ったか、一体の悪魔は嗤いをその顔に浮かべる。

「さて、この世界に災厄をもたらすとしよう。」

~~~~~

心地が良い。とにかく良い。

「ふあああああ………」

大欠伸をしながら思う。

こんなにもゆっくりと寝たのは何時振りだろうか。

ドクン、と一つ、嫌な動きで心臓が跳ねる。

「やべっ！今何時だ……！」

慌てて枕元にある時計に手を伸ばす——が、その手は空を切った。

そこでようやく、ウルベルトは辺りを確認する。

「え……ああ……。夢じゃなかったんだな。」

朝から嫌な汗をかいた、と独りごちる。もう一眠りしても良いかと思っただが、流石に外は日が出ているし、何より先程のショックで完全に目が覚めていた。

ウルベルトが目を覚ましたのは、一人で使うには余りにも広い寝室だった。天井付近に浮かぶ、淡い光の玉は確かコンティニユアルライト〈永續光〉によるものだったか。

部屋の内装は何気に凝られており、それでいて実用性に事欠かない、何とも便利なものである。

実は、これと同じ様な部屋を他にも10部屋程発見している。更に、同じ様な内装ではあるが、広間や食堂らしき場も確認している。

そう。今ウルベルトが居るのは、己がクリエイトフォートレス〈要塞建設〉の魔法で創り出した要塞の一室だ。

〈要塞建設〉に代表される、MP依存による作成系統の魔法は、維持し続けると少しずつMPが削られていく。

加えてウルベルトはワールド・デイズスターの職業クラスを取得しているため、「MP効率の悪化を代償として、攻撃魔法の威力を増大する。但し、解除不可」という、ある意味呪いじみた常時発動型特殊技術スキルがある。その為一般的なプレイヤーよりもMP消費が激しいのだ。従って現在その量は、ウルベルトのMP自然回復とせめぎ合って、ほんの少しずつだが減少し続けている。

「寝てもイマイチ休んだ気がしないな…」

これがMP消費によるものかどうかは分からないが、依然として身体の奥の方に僅かな倦怠感が残る。夢であつて欲しいとはこれっぽちも思いはしないが、急激な変化はやはり精神に伝わる。

「でも、だとしたら生身の俺は今どうなつてんだ…?」

意識だけアバターに乗り移つて、本当の肉体はセットを付けたまま失神しているのか。

それとも意識はコピーされた状態で、現実世界リアルではいつも通り生活しているのか。はたまたその存在すらも消滅しているのか。

後者ならば、面倒事は無いと思つていいだろう。

上部の方々がその馴れた手腕で、面倒のタネとなつた自分の事も抹消して下さるに違いない。

だが前者ならば…

「気付かれずに衰弱死…は無いにしても、突然肉体肉こに戻った時に点滴繋がれてる、とか冗談抜きに嫌だぞ。」

治療紛いのものを受けられれば良い方だ。下手をすれば臓器摘出されていた、などという事も——

「いや、有り得ない。それは無い。」

ウルベルトは自分に言い聞かせるようにして、この考えを頭から完全に追い払った。勢いに任せて、柔らかく身を包んでいた至高のベッドから飛び降りると、部屋を出て歩き出す。と言っても目的地は無く、強いて言うなら次の予定が見つかるまで、だ。

広大な建物内を何周しただろうか、いい加減歩くだけの行為に飽きて来た頃、ある考えがふと頭に浮かぶ。

「外、出て見るか…。」

昨日の森や、要塞こじの周辺地理、他の知的生物の有無も気になる。仲間—アインズ・ウル・ゴウンのメンバーの搜索だつて重要事項だ。

その為には、まずこの建物から出なくてはならないのだが…。

(やつぱり怖いんだよなあ…。)

ウルベルトはモモンガのような、遊びのある構成ではなく純戦闘系魔法詠唱者マジックキャスターであ

り、近接戦闘は苦手だ。だからこそ行き当たりばつたりのアクシデント——先日の洞窟での事件等——が起こった場合、対応し切れない恐れがある。この世界の生物が皆、あの人食^オ大鬼^ガ達のように弱いとは限らない。

「前衛……か。……〈第十位階怪物召喚〉」

取り敢えず思い付きで魔法を使う。なんだかMP消費量の管理が緩い気がするが。

空気を織り成したかのように出現したのは、体軀2mを超える真つ黒な犬。ただし、その凶悪な牙を持った頭部は全部で3つ。異形種の怪物だ。

「体力と物理防御に特化、攻撃もそこそこ出来る。及第点だな。」

『ケルベロス』と名付けられた召喚獣の詳細を、百科事典^{エンサイクロペディア}で見っていたウルベルトは、満足げに顔を上げる。

このモンスターであれば、100レベルプレイヤー相手でもある程度の時間稼ぎは可能だろう。

しかしウルベルトは、先程から1つだけある疑問を抱えていた。

「召喚獣……と繋がっている……？」

勿論、物理的に繋がっている訳ではない。だがこの形容し難い異様な感覚は、正に精神の繋がりと言うべきものか。実際、このモンスタースタールの思考や感情が伝わってきている。

「俺を守れ。」

発した言葉に対し、思念派で了承の意が伝わってくる。

「こりや面白い。コマンドを使わなくて良い分対応速度が速いな。」

のんびりと会話をしているが、召喚獣なのである一定の時間で消える事を忘れてはならない。

「これ以上の時間の浪費は愚かだ。」

己の底に意識を向け、本日3度目になる転移魔法を唱える。

グレイター・テレポーション
「へ上 位 転 移」

~~~~~

タン、と地面に降り立ち、一連の回避行動を取った後、ウルベルトは辺りを見渡す。

転移した先は森と草原の狭間、拠点且つ目印たる要塞から最寄りの場所だ。一応、隣には護るように召喚獣が控えている。

「やはり、これから冒険するとなるとワクワクしてくるな」

溢れ出る高揚感に身を任せ、異世界探索初めの一步を踏み出す。

「さて、未知なる旅の始まりだ。」

## 其の弐 爆撃の翼王

「えーっつと……。……冗談？」

鳥の囀る声が聴こえる。頭上では陽が照っているが、濃緑色の木の葉に遮られ、木漏れ日を作り出している。辺り一帯は生い茂る深い緑に囲まれ、一見にはジャングルとさして変わらない。

その一角、草木が枯れ切り周りと隔てられた、明らかに不自然な場所があった。それは思わず目を逸らしたくなるほど、歪な場所。

名を付けるとするならば、死に絶えた大地。

そんな中心にポツと、唯一生命を維持している、10メートルを超えるかと思われる巨大な木があった。

まだ水々しく艶を誇る葉。

光を求め、我先にと手を伸ばす枝々。

それはまるで、枯れていった生命の分まで生きようとしている様で――

――大樹の下、白い羽毛の衣でその身を包んだ人物は呟いた。

その言葉に反応してか否か、巨木が動く。

この地に飛ばされてから、早2時間が経過しようとしていた。

~~~~~

朝露湿る、青い草の匂いが鼻孔をくすぐる。同時に、ほんのり暖かい柔らかい朝日に照らされ、脳がゆつくりと覚醒に向かつていく。これほど良い目覚めはないだろう。

男は、心地良い鳥の声を聞きながら、ぐん、と伸びをした。

「あー。朝っぱらから最高の日だな。」

今日は久々の休日、やりたい事はいくらでもある。昨日買ったばかりの期待の新作だつて、今日の楽しみにと、とっておいたのだ。

そう、『期待の新作』。何処かで聞き覚えのあるフレーズに、いつの日かの悪夢が頭を過ぎるが、頭を振り考えを追い払う。

ちゃんと声優の欄は確認を取ったし、それにこんなに素晴らしい朝なのだから、わざわざ思い出す必要は無い、と。

「神様、素敵な朝をありがとう！」

調子に乗って、信じてもない神に感謝を告げる。毎日泥のように働いているのだ。

たまには羽を伸ばしたっていいだろう。

「——ん……………」

ふと違和感を感じ、首を傾げる。

——何か、日常とずれているような…。

「?草?」

「?…太陽?」

「?…鳥?」

周りを見渡す。

「……………ドコデスカ?…ココ…」

先までの幸福感が嘘のように雲散霧消していく。残るのは憔悴のみ。まさに、知らぬが仏とはこの事である。

自分がいたのは、全く見たことも無い、果てしなくただどこまでも広がる草原の中だった。ここが本当に地球ならば、深刻な大気汚染によって空はいつもどんよりと曇り、人間以外の生物も殆ど残っていないはずだ。体中を冷や汗が流れる感触が煩わしい。

「え〜と…と。どうしよう…」

目が覚めたらどこか分からない場所にいた。それも、現状を見るに恐らく地球ではない。改めて置かれた状況を考えると、激しい焦燥感に襲われる。昨日もいつもと変わらない日だったはずだ。宇宙人に拉致された様な覚えはない。

「何かするにしても、何がなんだか訳分かんねえ…」

じつとりと汗で濡れた、うつ伏せのままだった姿勢を、反動をつけて起こす。そして立ち上がりざま、もう一度周囲を確認する。

「体には異常はな……………」

絶句した。

己の身体中をくまなく覆う羽毛。背中から生えた一對の巨大な翼。思い通りに動く鉤爪の生えたその手足や、羽一枚一枚の細かさから、これが現実だと改めて理解させられる。その姿はもはや、人間を辞めたとしか思えないものだった。余りにもあんまりな事件に、失神しそうな衝撃を覚える。

「いつから…?」

余りの焦りにガンガンと響き初めた頭痛の中、他の誰かに問いかける。だがこんな原っぱの中、そもそも会話の成り立つ第三者というものが存在する訳がない。もしいたら、余程の変人か、バードウォッチングでもしている奴だろう。だが、他人の目がない

という事実が、この非常事態の中でペロロンチーノをかえって落ち着かせてくれた。

少しだけマシになった頭をフル回転させ、記憶の片隅から情報を引っ張り出す。

「……この格好……それにこの景色……ユグドラシルじゃないか？」

一昔前に流行った体感型ゲームだ。自分も例外ではなく、かなりはまり込んだDMM O—RPGの一つだった。しかし諸事情あつて、数年間ログインしていない。だが、このグラフィックや世界観は、正にあのゲームだ。頭の片隅に仕舞われた懐かしい記憶を、必死に手繰り寄せる。

「……ペロロンチーノ、だったか。」

バードマン

鳥人、ペロロンチーノ。自分のアカウント名だ。ゲーム内の友達はもちろん、実の姉とも協力して創り上げたギルド、アインズ・ウール・ゴウン。その全盛期には——自分が遠距離攻撃特化という事もあり——「爆撃の翼王」の二つ名で呼ばれていたものだ。

流石にそれだけで今の状況が全て説明できたとは思わないが、真偽は置いておいて、YUGGDRASIL2の噂も耳に挟んだことがある。

「先行配信でもやってんのかな……。まあ多少遊んでもバチは当たらんのだろ。」

バードマン

鳥人はそう呟くと、どこかに残る不安に蓋をして、気を紛らわすという意味でもその1歩を踏み出した。

~~~~~

憔悴が束の間の安堵に代わってから5分、ペロロンチーノは今度は絶望に陥っていた。

「なんで?!…有り得ない…!」

コンソールも出ない。

GMコールも効かない。

再びドン底に突き落とされた気分だ。

気付くきっかけは単純だった。

しばらく走って見たが、何時まで経っても——5分しか経っていないが——どこまでも同じ景色に嫌気が差し、高速で移動する方法を模索、自分の種族特殊<sup>ス</sup>技術<sup>キ</sup>を使おうとするが、何も反応しない。

——そして今に至る、というわけである。

「くそ、考えてみれば始めっからおかしかったんだ!」

風の感触、草の匂い。

触觉、嗅覚。

「どつちも電脳法違反じゃんか!」

電脳法とは、脳内ナノコンピュータ網を用い、利用する際に適用される法律である。DMMORPGであるユグドラシルも当然、この規律のお世話となっており、一切の触覚、味覚、嗅覚はプレイする上でシャットアウトされていた。

因みにこの法のおかげか、この手のゲームにおいて性風俗は殆ど流行らない。

「…ん、待てよ…。」

(もし『電脳法違反』だとしたら…この不可解な状況も説明出来る！)

自分にしてはなかなか冴えた頭脳に感動を覚える。だが…

「俺がヤバイって事には変わりねーじゃん！」

謎のゲームに強制参加、及び脱出不可能。

身体がモンスター化、未知の星でサバイバル生活。

どちらが良いか…究極の選択である。

「勘弁してくれよ…。」

会社を挙げての犯罪を犯す狂人がいるとは思えない。それに異世界転移なんてどこオカルトだ。どんどん悪い方へと進みそうになる考えを、頭を振って追い払う。

(どつちにしろ、何も判断できる材料がない以上、手掛かりはこつちから探しに行くしかない、か。)

焦る心を無理に落ち着かせたペロロンチーノは、その内心を表すかのように足早に歩

き出す。人工物を発見できれば何かしらの手掛かりも見つかると信じて。

「誰か〜！いませんか〜！」

小さくない声を発してみるも、それが気休めでしかない事は分かっている。

……

「あつついな〜……。」

……

「マジで暑い……」

……

「何も見当たらん……。」

……

「何でだ!!何故ここまで何も無い!!ここには草しか無いのかよ!」

どれほど歩いただろうか。歩き出した頃は上り始めだった太陽も、今では真上で燦々と輝いている。いくら歩こうとも全く変化の無い景色に、ペロロンチーノの忍耐も限界だった。

「太陽はアホみたい強いし、風だつてほつとんど吹かねえし!」

ギラギラと輝く太陽を睨みつけ、罵る。元の世界では大気汚染も深刻な問題ではあるが、この状況では、あの淀んだ雲のお陰で人類は助かっているのではないかとさえ思え

てくる。

「怒鳴つても仕方ないか…。取り敢えず、日陰探そう…日陰を…」

そう喘ぎ、容赦ない照り付けから逃れようとより遠くへと目を凝らす。——と、急激に視界がズームした。

「おわっ?!…なんだ…?」

慌てて頭を振る。もう一度辺りを見渡すと、視界は通常通りに戻っていた。

「今のは…視界拡大…?…『鷹の目』か!」

ホーク・アイ

ホーク・アイ

バードマン

『鷹の目』は、ユグドラシルにおいて、鳥人他ビースト系の種族5レベルで取得出来る種族特殊技術だ。視界拡大の効果があるため、遠距離からの攻撃にはかなり役立ってくれた覚えがある。

——ペロロンチーノとしての特殊技術は使えるようだ。だがそれなら…

「俺、マジで飛べんじゃね?」

自分の背後にくつついている羽。今までは重い荷物—というかコイツがマジで重い—程度の認識しかなかったが、現金なもので何だか光り輝いて見えてきた。早速羽ばたこうと試みる。

ユグドラシルの頃もその羽で宙を舞っていたが、それはあくまで設定上「空中移動」が可能であっただけで、己の器官の一部として「飛翔」していたわけではない。

「ん、と……こう、か……？」

それらしき所に入れると翼は微妙にピクピクとは動くものの、とても「飛ぶ」という行為には至らない。

やがて耐久上限を超える力を受け続けた筋繊維は、痙攣を始め、結果激痛が走る。俗に言う、吊る、というやつだ。

と言うより、今まで自分にくつついたものを突然動かせと言う方が無理難題だろう。

「ハア……無理！」

しばらく頑張っていたが、成功の兆しが見えて来ない事を直感し、一気に溜めていた息を吐く。仕方なく飛行の練習は道中にと諦め、再び遠くに目を凝らす。

（……んで……こうか！）

見事、『鷹の目』<sup>ホーク・アイ</sup>の再発動に成功すると、先程同様に視界が拡大される。

「なんかないかな……つと！」

適当に向けた視線の先には小さく見える、鬱蒼と生い茂る木々。

「よっしゃ！取り敢えずあそこで休憩しよう。」

（大体こつから1km弱つてとこかな。）

目的地までの大体の距離を見極めたペロロンチーノは、駆け足で森へと向かう。

「ほい、到着つと。」

ほぼ全速力で走って来たペロロンチーノは、全く疲れた様子も見せずにお目当ての日陰——木の根本に座り込んだ。

「ああ、暑い暑い。結局これといった目印も無し、か。」

ここに来るまでの間、一応周りに気を配りながら走ってきたが、一切の人工物は見つけられなかった。データ資料でしか見たことがなかった大自然の前に、初めこそ感動したものの、それしかないとなれば飽きもする。

しばらくゴロゴロしていたペロロンチーノだったが、ふと思いついた案を口にする。「はあ。いっその事、この森でも散策してみるか……?」

眩き、背後に広がる深緑の迷宮を肩越しに見やる。足場の悪い地形の中、真つ直ぐ歩ける保証はないが、方角如何に関しては、何故か妙に自信がある。とはいえ何の対策もなしに視界の悪い場所へ行くのは得策ではない。しかし——「じつとしても罅が明かない、か。」

足場も視界も開けてはいないが、注意していれば足場の悪い地面でも転ける事は無い。ペロロンチーノは一步一步慎重に足を進める。

ブーツ越しに足にじわじわと伝わる土の感触。現実世界では味わえない新鮮な体験に心躍る。

ゴツゴツと飛び出た木の根。鼻孔に薫る土の匂い。

森の中はまた森の中で楽しいものだ。先程までの草原の様子とは違い、少しではあるが小動物もチラホラと顔を見せている。

そんな調子でしばらく歩いてみると、辺りの雰囲気が一変する。どうやら先までよりも古い木が増えたようだ。森の中心に近づいた、ということだろう。

未知に対するワクワク感に、ユグドラシル時代のダンジョン攻略の記憶が蘇ってくる。——すると突如、他とは一線を画した大樹を発見した。

「ほお。デカイ木だな。」

全長は30メートルにはなるうかという代物。日本にも屋久杉と称される巨大な木の亡骸が南の島にあったが、この木は未だ生命を維持している。

ペロロンチーノは木の下まで歩み寄り、その幹をまじまじと見つめた。上の方まで侵食した苔とくすんだ焦げ茶色の分厚い樹皮は、重ねて来た歳を感じさせる。

「あゝ」

「うわっ！ 誰！！」

唐突にかけられた声に対し、間髪を入れず誰何する。だが返事は無く、ただ静寂だけが舞い降りる。

ホラー映画さながらのあまりの不気味さに、思わず身構えながら辺りを見渡す——すると、木の陰からこちらを伺う、2つの目玉があった。

「うわっ！何！！」

驚愕からか、扱いがより粗雑になったペロロンチーノ。臨戦態勢を取る彼の様子をかかいいながらそつと近付く少女に、ペロロンチーノは見覚えがあった。

（全体的に緑がかつた肌と、長く尖った耳…。森精霊ドライアードだろうな。）

「こんにちは？…で良いのかな？ドライアード、ちゃん？」

案外直ぐに立ち直ったペロロンチーノだが、自分から話しかけているくせにやたらと語尾に疑問符がつく。

「あ…私の名前は、ピニスン・ポール・ペルリア。…もしかして、あたしの事、覚えてない…？」

（森精霊ドライアードが個体名を…？ああ、イベント系のNPCみたいなもんか。）

「も、勿論覚えてるよ。ペロリア君。」

咄嗟に出てきた嘘は天啓とでも言うべきか。

「ああ、良かった。いきなりだけど、かなり切羽詰まっているから率直に言うね。実はこの間退治してもらった魔樹についてなんだけど、本体がもう目覚めようとしているんだ…。」

（魔樹…。植物系のモンスター…。？さっぱり話が分からん…。俺が以前退治したと  
言うが、100%別人だよな…。しかしああ言ってしまった以上、ここは貫き通すしか

ないか。」

ちよつと一言嘘を言っただけで、いきなり面倒事に巻き込まれ、頭を抱えなくなる。

「何！もう動き出すだと！ふくむ、どうするべきか…」

考え込むふりをし、俯きながらこつそり森精霊ドライアドの顔色を伺う。自分では取るべき行動はおろか、置かれている状況すら理解できない。

「前に来てくれた人達を呼んで、またやつつけてもらえたらなく…なんて。」

（正体不明の敵とは戦いたくないなあ…。ていうか前に来た人達つて誰だよ…。もしかして皆も異世界こっちに来てるのか？巧くそつちに誘導できれば…）

「えー、そ、俺の仲間達とは現在連絡が付かないんだよね…。で！だ。君の方から彼らに連絡を取ることは出来ないかな？」

自分の恐るべき対人スキルに感動しながら、ペロロンチーノはある一つの事に気が付く。

（この世界、魔法という物は存在しているのか？いや、待て。俺の所持物は何処に行った？！）

最強装備こそギルドマスターに預けたものの、それ以外の装備は持ったままのはずだ。現在の防御力は丸裸同然。それに溜め込んでいた大量の巻物スクロールが無いとなると、致命的な弱体化は免れない。

習得していないとはいえ、魔法が存在しないとなると、今後取るべき行動が全く変わってくるだろう。

「……うん。それは申し訳無いけどできないなあ。流石に私も魔法は使えないから……」  
 「よし、魔法はあるんだ。……んん！では少し待っていてくれないか？」

そう言うのとペロロンチーノは近くの木陰に逃げ込む。

「危ね、素が出た。とはいえ、魔法の存在は確認できたな。えっと、次はつと。」

現在の持ち物はあるのか無いのか。もしあるなら何処にあるのか。それ如何で今後の動きは大きく変わる。もし転移直後の場所周辺にあつたら最悪だが、不思議と帰り道は記憶出来ている為、心配は無いだろう。——だが……

(可能性は一つずつでも潰しておいた方がいいよな。)

~~~~~

救世主たる鳥人(バードマン)の変わり様に、ピンスン・ポール・ペルリアは心底驚いた。

以前——正確な数字は遠い昔のことなので忘れた——この羽の生えた人が来たときは、凄く立派な鎧を身に纏い、持っていた武器も強さはイマイチピンと来なかったものの、目の玉が飛び出る程綺麗なものだった。

それなのに、現れたばかりのこの鳥人バードマンは、防御力の有りそうな物は一切何も身に付けておらず、その上素手という有様だった。元の装備はどうしたのだろう、仲間はどこへ行ったのだろう、そういった心配が心中で渦巻く。

「よっ!!お待たせ。」

「ギャツ!」

思考の渦に沈んでいた者に、意識外からの不意打ちはクリティカルだ。それは森精靈ドレイアードとて例外ではない。

「いきなり脅かす?普通!」

なんの前触れもなしに背後から声を掛けてきた鳥を、涙目で睨む。意図的で無かったのならここまで怒りはしないが、相手は悪戯が成功した子供特有のニヤニヤとした笑みを浮かべている。故意であったのは確実だ。

「ごめんごめん。」

「どうして再会早々そういうことするかなあ!」

「挨拶みたいなもんだよ。」

ああ言えばこう言う即座の返答。今置かれているシチュエーションをあろう事か楽しんでるようだ。加えて、どう言及してもものらしくらりと逃げて行きそうな予感に、追撃は無意味と判断したピニスは改めてその服装に目をやる。

先程迄は、ほとんど丸裸同然の格好だった。だが、今はどうだろう。

流れる様な群青のサーコート、顔全体を覆い隠す漆黒の兜、同じく真つ黒な——何で作られたかは分からない——革鎧など、様々な装備で身を固めていた。それに加え、その手には数多くの宝石を嵌め込んだ、骨製の弓を握っている。どれを取っても明らかに、先の装備より良いものだ。

「まあ、それはおいといて、問題の魔樹は、どこに居るの？」

静寂を何と勘違いしたか、人の非難をさり気無くスルーしたような気がするが、この際は置いておこう。

「もつと森の深いところなんだけどね……。木々の枯れ切った所があるんだ。多分その近くに……。」

「ん、じゃ案内お願い。」

これまた散歩しに行く、とでも言うような軽いノリで即答した鳥に、ピンスンは狂気なモノを見る目を向ける。

「あんた……前に自分が一部と戦って苦戦したの覚えてないの？今度は本体が目覚めるんだよ?。」

「う、あ……ちよつと下見に、ね?。」

下見程度でもかの魔樹であれば……、と思わないでもないが、この鳥の実力は既に己が

目でしかと知っている。そのため、数秒の逡巡の末、妥協するに至る。——魔樹を刺激しない、と厳しく念押しした上で。

「はいはい。OK。了解。」

やっぱりこいつ信用できない。

背後に元救世主を引き連れ、ピンスン・ポール・ペルリアは変わり果てた森の中を進む。

端からすれば、一般人からしてみれば、昔と何も変わらない森だろう。

しかし、森精霊ドライアードの寿命、そして種族的な森との繋がりによつて、まるで敵地アウエーに來たかのような錯覚を覚える。

「大丈夫か？」

バードマン鳥人の氣遣いに、自分が苦渋の面で歩いている事に氣付かされる。

「ああ、うん。大丈夫。」

「そうか。」

優しい所もあるな、そもそも前にあつた時はこんな奴だったかと、他愛もない事を考えながら歩く。少しの氣晴らしというより、そうでもしていないと氣が滅入る。心無しか周囲から敵対的な目線まで感じて來るようだ。

「そろそろだと思っただけど——」

その時、森の悲鳴がより一層強くなった。目的地はすぐそこだ。

視界が開け、目的の場所がその姿を現した。

先程とは打って変わって緑の欠けた土地。

森の中心部に近いはずのそこには植物らしい植物が一切無く、ただ荒れた地面が続いていた。

「ここだよ。この何処かに、魔樹はいる。」

緊張の面持ちでピニスンが言う。

「一定の期間毎に一部が起きて、この辺を荒らし回ってるんだ。」

「なるほど。このいっぱいあるデコボコは木を引っこ抜いた跡って訳だ。」

そう言い指差すペロロンチーノの先には、巨大な蟻塚のようなものが複数に渡って鎮座していた。

（周りに残骸が無いってことは…木でも食うのか？でも何故…地中か。）

敵の居場所をなんとなく悟ったペロロンチーノは、冷静に次に取るべき行動を模索する。

（逃げ…たくはないな。折角の自分の力を知るチャンスだ。でももしヤバいのが来たら…）

「そんな時は逃げりゃいいか。ありったけの逃走用アイテムは持つてるしな。」

魔樹という呼び名から察するに、敵は恐らくトレント。刺突にまあまあ耐性を持つていたとしても、敏捷性を犠牲に、体力にステータスを振られたモンスターに苦戦するほど弱くはない。それに、敵がもし同格の100レベルだったとしても、この地形、この装備ならかなり善戦出来る自信がある。森での戦いは弓兵アーチャーの職業的には不利だが、それを補って余りある別な職業クラスや、アイテムもある。

覚悟を決めたペロロンチーノは、とあるスキルを発動させ、真上に弓を放った後、ピニスンに向かい直る。

「ちよいと離れててもらえるか？そこにいると少々危険だからな。」

「え、ちよ、ちよつと待って。一体何したって言うの？」

慌てふためくピニスンに、まあ当然の反応だな、とペロロンチーノは冷静に思う。とはいえ、今更考えを変える気も無いし、もう手遅れだ。

刹那。

ドガガガツという爆音が大地を削った。

己のスキル、「レインアロー【天河の一射】」が起こした惨状を見つめ、ペロロンチーノは自分の力に啞う。

地形が先程と逆だ。多数の蟻塚があった土地は、余す所なく蟻地獄へと変化している。

「あ……え……」

後ろで森精霊ドライアドが絶句しているが、ペロロンチーノの注意は既に其処には無い。

冷徹な視線を送る先、大地を割り、ゆつくりと地中から姿を見せるものがいた。

「あ……ああ……」

再びピニスンが言葉を失ったかの様に喘いでいるが、先程のものが呆然だとするなら、今度は絶望だろうか。

「おっと………。マジか……。」

想像していたのは、せいぜい10mのトレント上位種だ。これには流石のペロロンチーノも言葉を失う。

ずるずると現れているその頭頂部の大きさから考えて、ざっと100m超の巨木が地面に埋まっているなど、誰が想像出来ようか。圧倒的なその巨体に、ただ立ち尽くすペロロンチーノ。

完全に〈へ生えた〉後、300mの枝—と言うより最早触手だ—を振り回し、周辺の木を根こそぎ口にする。

「草食……な訳無いよな……」

ペロロンチーノの眩きに応えるかのように、口から牙を覗かせた木の怪物は、咆哮を上げる。

戦いの幕は開かれた。

其の参 死の支配者

Dive Massiver
Multiplayer
Online
Role
Playing
Game

通称 DMMORPG

仮想世界で現実にいるかの如く遊べる、体感型ゲームの事である。
数多開発されたその中に、燦然と輝く一つのタイトルがあった。

YUGGDRASIL

西暦2126年、日本のメーカーが満を持して発売したゲームだ。
YUGGDRASILは、その広大な世界^{マップ}、並びに、膨大な職業^{クラス}、異様な程広いプレイヤーの自由度から、日本国内において、爆発的な人気を誇った。

しかし、それも過去の話。

全盛期から経つこと12年。

YUGGDRASILは、最後の時を迎えようとしていた。

~~~~~

そこは円卓の間と名付けられた部屋の中央、黒曜石で出来た円卓を囲むように配置された四一席の内の二席。  
ラウンドテーブル

そこに座っているのは、明らかに人間ではない、異形の者達。

片や、その眼窩に強い赤を灯した骸骨。金と紫の縁を纏った豪華な漆黒のアカデミックガウンを羽織っている。

そしてもう一体。コールタールを思わせるそれは、黒いゼリー状の物体で構成され、常にその表面から何かが流れ出している。

前者は死の支配者、オーバード後者は古き漆黒の粘体、エルダー・ブラック・ウィズどちらも最高位難易度ダンジョンの配置モンスターとして知られ、オーバード死の支配者各種は最高位の凶悪な魔法の行使、エルダー・ブラック・ウィズ古き漆黒の粘体は武器の劣化能力で嫌われている。

とはいっても、彼らはモンスターではない。

プレイヤーだ。

ユグドラシルでは自身のアバターをほぼ際限なく改造出来る。カスタマイズ選択できる種族は、上位種族まで含めると700にも及び、ビジュアル外装だつて専用のアイテムさえあれば思いのまま

まだ。

その内の一体、死の支配者<sup>オーバーロード</sup>が口を動かすことなく言葉を発する。当時の技術では会話に合わせた表情変化までは再現できなかつたのだ。

「本当に久しぶりです、へろへろさん。ユグドラシルのサービス最終日とはいええ、正直本当に来てもらえるなんて思ってもいませんでしたよ。」

「いやー、本当におひさしです、モモンガさん。」

へろへろと呼ばれたプレイヤーが答えるが、死の支配者<sup>オーバーロード</sup>——モモンガに比べ、どこもなく生気が薄れている。

「リアルで転職をされて以来ですから、どれくらいになりますかね?……二年ぐらい前ですかね?」

「あー、それぐらいですねー。うわー、そんなに時間が経ってるんだ。……やばいなあ。残業ばかりでこのごろ時間の感覚が変なんですよね。」

「それかなり危ないんじゃないですか?大丈夫なんですか?」

「体ですか?超ボロボロですよ。流石に医者にかかるまではいらないですけど、それに近いレベルでやばいです。むちゃくちゃ逃げたいですよ。とは言っても食べていくには稼がなくてはならないわけで、奴隷のごとく鞭で打たれながら必死に働いていますよ。」

「うわー。」

余りに実感のこもった声に、モモンガはドン引き、とりアクションを取る。

「まじ、大変です。」

そこからはへろへろの愚痴が次々と流れ出し、モモンガは一方的に聞く側へとシフトしていく。

仮想現実において、現実世界リアルの話は忌避される傾向が強い。それはゲームにまで現実世界リアルを持ち込まないで欲しいと、言わば避暑地的な意味だろう。

しかし、モモンガ達の所属するギルド、アインズ・ウール・ゴウンでは違った。それはギルド加入条件に、アバターが異業種である事、そして社会人である事、というものがあるからだ。その為、自分達の仕事の話になることが多く、ギルドメンバーもそれを鷹揚に受け入れていた。

「……………すいません。愚痴ばかりこぼしちやつて。あんまり言えないんですよ、向こうじゃ。」

最終日なのに、と頭らしき部分を下げたへろへろに、死の支配者オーバーロードは優しく返す。

「気にしないでください、へろへろさん。そんなに疲れているのに無理を言つて来てもらったんですから。愚痴くらいだったらどんだけでも飲み干せますって。」

「いや、ほんとにありがとうございます、モモンガさん。こつちもログインして久しぶり

に仲間に来て嬉しかったですよ。」

「そうおっしゃってくださるとこちらとしても嬉しいですね。」

「……………ですけど、そろそろ。」

へ口へ口の触腕が何かを突くように動く。コンソールを操作しているのだ。

「ああ、確かにもう時間ですね…………。」

「すいません、モモンガさん。」

心の内に浮かんだ感情を押し殺し、モモンガは笑顔を顔に貼り付ける。

「そうですか。それは残念ですね。……………本当に楽しい時間はあつという間ですね。」

「本当は最後まで一緒に過ごしたいんですけど、流石にちよつと眠すぎて。」

「あー、お疲れですしね。すぐにアウトして、ゆっくり休んでください。」

「本当にすいません。……………モモンガさん。いや、ギルド長はどうされるんですか?」

「私はサービス終了の強制ログアウトまで残っていようかと考えています。時間はまだありますし、もしかするとどなたか戻ってくるかもしれないから。」

そう言いながらもモモンガはその確率が非常に低い事を知っている。何しろ全ギルドメンバー四一人中、三七人は引退し、このギルドから名前を消したのだ。先程へ口以外の残りのメンバーが来てくれたが、別の用事が入っていたらしく、早々に去ってしまった。

「そうですか。……でも正直ここがまだ残っているなんて思ってもいませんでしたよ。」

瞬間、形容し難い感情が走り、モモンガは顔を歪めた。

いつ戻るかも分からないギルドメンバーの為に、必死になって  
アインズ・ウール・ゴウン家を守り続けていた。それなのにその仲間からこんな言葉を  
投げられたら、シヨックで固まりもするだろう。

しかし、そんな感情も次の言葉で霧散する。

「モモンガさんがギルド長として、俺たちがいつ帰ってきてても良いように維持してくれ  
ていたんですね。感謝します。」

「……皆で作り上げたものですからね。誰が戻ってきてても良いように維持管理していく  
のはギルド長としての仕事ですから！」

「そんなモモンガさんがギルド長だからこそ、俺たちはこのゲームをあれほど楽しめた  
んでしょね。……次にお会いするときは、ユグドラシルⅡとかだと良いですね。」

「Ⅱの噂は聞いたためしがないですが……でもおっしゃるとおり、そうだと良いです  
ね。」

「そのときはまたぜひ！じゃ、そろそろ睡魔がやばいので……アウトします。最後にお  
会いできて嬉しかったです。お疲れ様です。」

「——っ」

一瞬だけ、モモンガは口ごもる。しかしすぐに最後の言葉を贈った。

「こちらもお会いできて嬉しかったです。お疲れ様でした。」

ヘロヘロの頭上にピコン、と笑顔のマークが表示される。ユグドラシルでは表情の變化がないため、こういった感情エモーションマークで代用するのだ。

「またどこかでお会いしましょう。」

そう残し、ヘロヘロの姿が掻き消え——静寂が訪れる。

しかし、未だに響くモモンガの声。

「今日がサービス終了の日ですし、お疲れなのは理解できますが、せつかくですから最後まで残っていかれませんか——」

言えずじまいの言葉を吐き出すが、後に残るのは寂寥感のみだ。

「はあ。」

「どこかでお会いしましょう……か。」

そんな言葉は何度も聞いた。

——また会いましょう。

——またね。

その誰もが、再び帰ってくることはなかった。また会うことはなかった。

それでも、モモンガはひたすら待ち続けた。しかし、最後の一人がこうして去って

行った今、ダムは決壊寸前だった。

「どこで、何時会うのだろうね——」

モモンガの肩がわななく。

様々な感情を乗せて振り上げられた腕は——振り下ろされることはなかった。

ピコンッ

【武人建御雷さんより、<sup>メッセージ</sup>伝言が届きました。】

画面隅にポップアップされた通知を見て、モモンガは啞然とし、慌てて応答のアイコンをクリックする。

『お、つながった！よお〜モモンガさん、久しぶり！今外に居るだけどき、悪いんだが、ちよつと拾ってくんね？ツヴェ<sup>カエル</sup>グ<sup>ドモ</sup>達が邪魔で中々そつちに行けないんだよ。』

懐かしい友の声に、先程の荒んでいた心が癒えていくようだった。まさかギルドを抜けた人までが来てくれるとは…。歓喜の感情を隠しもせず、モモンガは答える。

『ええ！今行きます！』

結論から言えば、救出は困難を極めた。

アインズ・ウール・ゴウンの本拠地、ナザリック地下大墳墓を囲むゲレンデラ沼地には、多数のモンスターが棲息している。

ツヴェークはその代表で、強いものでは80レベル後半に及ぶ蛙型のモンスターだ。

ただこれらはある非常に厄介な性質を持っていた。それは、戦闘行為に入ると周囲の間を次々と呼び寄せ、鼠算式に敵数が増えていく、という悪質なものだった。

武人建御雷は、パーティーを組む時には専ら物理火力役として参戦するなど、攻撃系の戦士職ではある。しかし、最強装備を引退時に預けたままでは、ツヴェークを倒す決定打に欠けていた。

結果、仲間の呼び掛けに応えたツヴェークが集合し、沼地の一角が蛙だらけになるという惨状を引き起こしていた。

「全く、あそこに単身で飛び込むとか、無茶にも程がありますよ。」

リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンによる転移で円卓の間に戻っては来たものの、巻き添えを食らって半分程度HPを削られたモモンガは苦言を呈す。

「悪い悪い、どうにかしてモモンガさんに気付いて欲しくてさ。んで、カエル共がナザリックの警報になってたなーって事思いついて。」

「そんな七面倒な事しなくても、初めから〈伝言〉送ってくれば答えましたよ?」

「巻物がある事思いついたらもういつばいいいた。」

そう言って豪快に笑う武人建御雷。半巨人の図体と声が見事に合っている。

記憶のままの性格と、全盛期<sup>昔</sup>と変わらず仲間と会話していることに、モモンガは破顔する。

「おっと、もうこんな時間か。」

「あ、そうだ。最後はここではなく、玉座の間に行こうと思っていたんですけど、どうですかね?」

「ああ、確かに最後を迎えるならあそこしかないな。」

そう言い、二人はおもむろに立ち上がる。

「なあ、モモンガさん。」

玉座の間へと、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンによる転移を行おうとしたモモンガに、武人建御雷は声をかけた。

「どうかしましたか?」

「あのさ……。」

何時に無く改まった、また齒切れの悪い友人の声にモモンガは疑念を抱く。対する武人建御雷は、モモンガに向き直るとまっすぐ見つめる。

「モモンガさん、あんたには本当に迷惑をかけた。」

「え、ちよつ、いきなりどうしたんですか?」

突然の謝罪に目を白黒させるモモンガ。

「話しててわかったよ。あんた、ずっと一人でアインズ・ウール・ゴウンを守ってくれてたんだな。」

「え…まあ…そうなりますかね…。」

「正直言うと、本当はインするの、ちよつと迷つてたんだよ。一回ギルドを抜けた身でここに戻った時、モモンガさんにどんな顔していいかわかんないしさ。」

「そんな事、気にしなくても——」

それでも——と、武人建御雷は続ける。

「最後に挨拶できて良かったよ。思い出を守っていてくれて、感謝する。」

気にしないで下さいと言おうとした矢先、仲間から頭を下げられ、モモンガは慌てる。

「そ、そうだ！建御雷さん、もう一度ギルドに入りませんか？」

混乱のあまり、まるで関係のない話題を提示してしまったが、まあ本心なので良しとする事にする。

「ん、ああ、最後にもう一度、思い出に浸るのも悪くないな。でも、ツール持ってたか？」  
「ああ。いや、今は持つてないです。」

ギルド加入を初めとする、いくつかの行動—NPCのフレーバーテキストの書き換え等—は、専用のツールを必要とするものがある。

しかし、モモンガはそのツールを持ち合わせていなかった。では何故、と首を傾げた

武人建御雷に、モモンガは悪戯つぽく笑う——と言つても、顔は動かないが。

「でも、大丈夫です。今日だけは。」

そう言い、モモンガは壁に歩み寄る。その先にあつたのは、壁の穴に浮かぶ一杖の杖スタツプだ。

スタツプ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン。

ギリシヤ神話における神々の使者、ヘルメスの杖である使者の杖をモチーフにしたそれは、ギルド、アインズ・ウール・ゴウンの象徴、言わばギルドを具現化したものだ。

ギルド武器は、その同盟創立からメンバー全員一致団結して欲しいとの意味を込めて、運営が作り出したシステムだ。というのも、ギルド武器は一般の武器と比べて総合データ量が破格であり、当然それに伴い攻撃力も上がる。ただそれだけではなく、様々な追加効果や特殊な能力まで込めることができる。

アインズ・ウール・ゴウンはいい意味でも悪い意味でも凝り性な人間が多かつた。そんな者達が、ギルド武器などという作り甲斐のあり過ぎるものを、黙って見ているだろうか。

当然否である。

ギルド武器の素材とすべく、超レアドロップ品を求めて何日も狩り続ける者がいた。

もつと色んな能力を付けようと、高額な課金をしてまで満足のデータ量を確保した者がいた。

悪のギルドならそれらしい武器にしようぜ、と言って無意味なエフェクトを注ぎ込んだ者がいた。

そんな涙ぐましい努力の末、完成したのはゲームYUGGDRASILにおいて最上級の効果を持つとした世界級アイテムに匹敵するレベルにまでなっている。

しかし、ギルド武器が破壊されれば、即ちそのギルドの崩壊を意味する。それが、ここまで破壊力を持っているにも関わらず、地下深くに封印されている理由だった。

そんな輝かしい黄金の日々を脳裏に振り返りながら、モモンガはその杖を手取る。すると現れる、どす黒いオーラ。それは次々と人の苦悶の表情へと形を変え、消えていく。

「うわあー。こりやすごい。」

モモンガの後ろから、覗き込むようにして見ていた武人建御雷が苦笑しながら言う。「ホントに、皆の努力の結晶ですよ、これは。」

そんな風に返しながら、モモンガは杖に込められた一つの効果を使った。すると武人建御雷にはギルドの招待状が届く。

「おー来たな。ギルド武器ってかなり便利な使い方もあるもんだな。」

「ええ、まあ。建御雷さんはどちらかという武器の側面に力入れてましたもんね。」

言外に、それ以外は協力してましたっけー？、などと思うと、言わんとしている事が通じたのか、何処か笑いを浮かべた顔で、俺はそっち担当だったからな、と開き直る。

「じゃ、加入つと。」

武人建御雷が加入のアイコンをクリックすると、モモンガの画面に“武人建御雷さんがギルドに加入しました。”と表示された。

「では改めて。お帰りなさい、武人建御雷さん。」

「おう。ただいま、モモンガさん。」

~~~~~

武人建御雷がギルド復帰を果たした後、二人は先の話通り玉座の間の前、ソロモン^{レメゲトン}の指輪へと転移した。

無骨なヒヒイロカネ製の扉だ。

だがそれ故に、醸し出す雰囲気は濃厚であり、進もうとする者への威圧を感じられた。

そんな扉を、モモンガは軽く手で押し開ける。

中はかなり広い造りになっていた。

部屋中に開けられた壁の穴に置かれているのは、計67体の石像達。天井には、四色に輝くクリスタルが備え付けられている。各々が自ら光を発しており、大理石の床に、様々な色影を落としている。

しかし、それとは別に、部屋に待機していた人型の七つの影があつた。先頭の一人は老人だが、他は全員、メイドという奇妙な編成だ。

しかも、メイド達は皆、感嘆を超え不自然さを覚えるほどの美女である。髪型も、シニヨン、夜会巻き、ロールヘアと様々。だが彼女らは単なるメイドでは無い。

ナザリック地下大墳墓の最終防衛線たる戦闘^{ブレイアデス}メイド、^{Non Player Character}NPCだ。

「本当は時間を掛けて、歩いて行こうかと思つてたんですけどね。」

部屋に入ると同時に頭を下げた美女達を眺めながら、モモンガが言う。

「おいおい、どんだけの距離あると思つてんだよ。」

モモンガの発言に、武人建御雷から思わず突っ込みが入る。

ナザリック地下大墳墓、^{ラウンドテーブル}円卓の間から玉座の間までは、^{リング・オブ・アインズ・ウィール・ゴウン}指輪を使わな

いとすれば最短距離でも10分はかかる。ここまで広大なダンジョンを維持できているのも、仲間達の課金のおかげだ。

それに対し、——だって色々と見ていきたくないじゃないですか？——と愚痴るモモンガ。

「まあ、気持ちには分かるけどな。」

ここに来るまでの間の通路にも、恐らく仲間達は数多のギミックやその面影を残しているだろう。しかし、色々と話し込んでしまった以上、最後の見物をしている時間は残されていないかった。

流石に、廊下を歩いていたら強制ログアウト、は悲しすぎる。

「代わりにセバス達連れてこようや。」

そう言い武人建御雷は、先頭の老人―セバス・チャンの肩に、ポン、と手を置く。

「確かに、最後くらい彼らを働かせてあげましょうかね。」

「言われてみれば、ここまで来た奴らは一人もいなかったんだな。」

実際言葉にすると、感慨深いような誇らしいような、複雑な気分を抱く。

「ええ。最終日だから、捨て身で誰か来ないかとも思ってたんですけどね。」

もう終わりだ、という感情が後を引いているのか、口調がどうしても下がりがちになる。そんな雰囲気を感じてくれたのか、武人建御雷は努めて明るい声を出した。

「ま、最後なんだから辛気臭い顔すんなよ、モモンガさん。」

「…そうですね。締めは玉座の間でしましょう。付き従え。」

NPCを動かすコマンドを発すると、モモンガは先だって歩き始める。

やがて一行は恐ろしく巨大な門の前に立つ。

「ホントに凄いよな、これは。」

「ええ、デザイン担当の人が泣いていましたよね。」

5 mを超える巨大な門——玉座の間の入り口は両開きで、左右それぞれ異様にリアルな彫刻が彫られている。

右には黒い地に、全身に漆黒の炎を宿した悪魔。

左には白の地に、慈愛に溢れた聖女を象る女神。

どちらも、人以外の者が彫ったのではないかと思える程、精巧に造られている。このまま襲い掛かってきても可笑しくはない。——というか創った人間はそういう事を仕出かす輩だった。

「じゃ、開けますよ。」

「ああ。」

武人建御雷はおろか、ギルドマスターたるモモンガでさえ、玉座の間には数えられる程しか入ったことが無い。謎の感動と共に、モモンガはその扉に触れる——と、扉は重々しく開く。

「おお……。」

そこに広がっていたのは正に圧巻だった。

今迄とは比べ物にならない程、広大且つ優美な広間。床から天井に至るまで、細部に施された精妙巧緻な装飾。金銀をふんだんに使ったその部屋は、その重厚さを以て、全身に伸し掛るような雰囲気を与えてくる。

そう、此処こそがかつて、ギルド　アインズ・ウール・ゴウンのメンバーが凝りに凝った聖域。ナザリック地下大墳墓最奥にして最重要箇所。YUGGDRASILでも屈指に入るクオリティーとモモンガは思っている――玉座の間である。

血の色に染まった床敷の両側、垂れ下がった紅蓮の布地には、41の不思議な紋様が描かれている。

そして何よりも目を引くのは、その玉座だ。

黒曜石の黒を基調とし、サファイアやルビーなど、様々な宝石を使ったその玉座。あたかも天を突くように高く突き出している背。そして後光のように光り輝く、アインズ・ウール・ゴウンのギルドサイン。

そしてその隣にはある人影があった。

「アルベドか。」

守護者統括、アルベド。

ギルド、アインズ・ウール・ゴウンの最奥を守護する最硬のNPCだ。

しかし、モモンガの目は若干の険を持って向けられていた。

「え、世界級アイテム。」

「…誰が持たせたのやら…。」

アルベドが手にしていたのは宝物庫にあるはずの世界級アイテムの一つ、真なる無だった。

世界級アイテムはその破格過ぎる性能から、個人が持てばそのプレイヤーの知名度は YUGGDRASIL において、最上級にまで昇り詰める。そんなアイテムを、アインズ・ウール・ゴウンは十一個も保有している。これは圧倒的な数だ——続くギルドで保有数三つなのだから。

それ程までのアイテムをNPCが所持している理由、それは創造者が持たせたからに他ならない。

「…タブラ・スマラグディナだな…。」

「…間違いないですね…。」

一瞬で同じ結論に達したモモンガと武人建御雷は、同時に溜息をつく。ここ玉座の間へ来ることは、ギルドメンバーだとしても滅多にない。そのため誰も気づかなかつたのだろう。彼のことだから悪戯、と言うよりはサプライズ気分で行ったのだろうが、世界級アイテムまで持ち出すのは些かやりすぎな気もする。

「……………取り上げるか？」

アインズ・ウール・ゴウンは多数決を重んじるギルドだ。メンバーが協力して集めた貴重なアイテムを、個人的な理由で動かして良いはずが無い。

しばしの間思案した後、モモンガは判決を下す。

「…いえ、今日に限り、許してあげましょう。最終日の情けで彼の思いを尊重したいので。」

「そういう事なら了解です、ギルドマスター。」

仲間の了承に感情エモーションマークで返すと、先程から好奇心が刺激されている物を開く。

「お、おい…こりゃ凄いな…。」

地雷を踏んだ気がした。彼女を創造したタブラ・スマラグデイナはいわば設定厨だ。彼女のフレイバーテキストに書かれた膨大な文字の量に、モモンガと武人建御雷は瞠目する。

それは一大叙事詩の如く。最早呆れ返り、読む気も失せたモモンガは、頭文字読み—
—思いっ切り下にスクロールする。

そして最後尾で停止する文字の濁流。その最後を飾る一文が目に入った時、二人は目を点にする。

『ちなみにビッチである。』

沈黙。

「……はあぁー……」

同時に吐き出される深い溜息。

「ギャップ萌えつてあの人でしたっけ……」

「いくら何でもこれは……無えだろ……」

ギャップ萌えという理解の範囲外に位置する性癖、というか美女に付けるにはあまりにも相応しく無い設定に、健全な男二人は頭を抱える。

「……書き換えます。」

「^{ワールド}世界級アイテムは許してもこっちはダメなのか。」

静かに、しかしはつきりと断言したモモンガに、武人建御雷は盛大に吹き出す。

無言のまま、アルベドにギルド武器を突き付けるモモンガ。するとコンソールの隣にキーボードが表示される。

「何か入れましょうか?」

「ん?……そうだ!」

ニヤリ、という擬音が相応しい雰囲気を纏い、武人建御雷がズイ、と身を乗り出す。何かを打ち込んだ後、元の位置に引いた武人建御雷は、どうぞどうぞと言わんばかりに己が書き直した部分を指し示す。その挙動に何か怪しいものを感じながら、素直に従う。

『モモンガを愛している。』

「ちよつと！建御雷さん何してくれんですか！というか勝手にツールまで閉じて！」
「ついでに写真も撮つときますか？」

良い彼女がいて羨ましいいな、と嗤う武人建御雷に、モモンガは自分の現状を見返し思わず後ずさる。

「…あなたは悪魔ですか。」

「いや、俺は半巨人^{ネフレイム}だな。悪魔はウルベルトだ。」

「種族変えるべきです！」

ド正論をかました返答に、思わずつつこむ声量も上がる。それを受けて武人建御雷は、含み笑いをしてから言った。

「少しは気が晴れたか？」

「え？」

「モモンガさん、目に見えて落ち込んでるからさ。」

仲間との会話は嘗ての場面と重なり、それを心から楽しんでる自分がいる。しかしその大きさに比例し、虚しさもまた膨れ上がっていく。そんな心中を抱えているのは事実ではある。

だがそれが他人から見ても明らかな程であるとは思ってもいなかった。自分の女々しさに呆れる。

気を使わせてしまったという思いから、咄嗟に謝罪の言葉が口をつきそうになる。だが先の彼の言う通り、形だけでも最後は前向きで居たい。

「ありがとうございます。武人建御雷さん。」

「おうよ。」

「…では、ここで最後にしましょう。平伏せ。」

コマンドを使い、NPCを平伏させて締めくくろうとするモモンガに、突如待ったがかかる。

「おいおい、立ったままはないだろう。モモンガさん、あんたはギルドマスターなんだから玉座に座ろうぜ。」

「でも……いや、分かりました。」

一瞬戸惑うが、しっかりと腰掛けるモモンガ。それを見届けると、武人建御雷はどこか遠くを見るように話す。

「…ユグドラシルが終わっても、別に皆いなくなるわけじゃない。リアルに戻ったら、また皆で飲みにも行こうぜ、モモンガさん。」

「ぜひとも。ギルドメンバー全員誘いましょう。」

「んじゃ、アインズ・ウール・ゴウンに乾杯、だな。」

茶化したような口調で言う友達に、笑って答える。

「はは、そうですね。」

「アインズ・ウール・ゴウン昔に乾杯、か。」

古き栄光への感傷を込めた眩きは誰の耳に入る事もなく――

――世界は終わる。

其の肆 武の二刀侍

「……ん？」

初めに声を上げたのはモモンガだった。

「え……と……？ ユグドラシル……終わってないのか？」

サービス終了時刻はどうに過ぎていく。ゲーム「YUGGDRASIL」は既に過去の遺物として電子の海へと帰している筈。しかし玉座の間が未だ存在しているのは何故か。

ようやく我に返った武人建御雷も、この異常に次いで動き始める。――が。

「あ、あれ……？」

「どうしました？ 建御雷さん。」

「コンソールが……出ないんだが……。」

明らかな困惑を乗せた声でギルドマスターに訴える。しかし困惑は――当然だが――モモンガも同じだったようで、何かを突くモーションをする。

「……。ホントだ……。っていうかGMコールも効かない……？」

「サーバー落ちのタイムロスか……？」

「ああ、あり得ますね。……運営も最後までやってくれるな……」

状況は未だ分からずだが、同じ境遇の他者と会話をする事で心に余裕が出来た二人。ギルドマスターの、多少の怒気を孕んだ台詞に、武人建御雷も同意していた。折角最後を美しく飾られたというのに、全てを台無しにしてくれた気分だ。

「まあ、最後までユグドラシル運営らしいといえは、らしいですけどね。」

しかし、そんな余裕も怒りも次の一瞬で完璧に吹っ飛ぶ事となった。

「如何なさいましたか？」

「……？」

突然の聞き慣れぬ女性の声に、二人は思わず辺りを見渡す。

だが当然、他プレイヤーの存在は無い。いるのは平伏すNPCのみだ。

「モモンガさん、なんか言ったか？」

「建御雷さんも聞こえました？」

「誰だ……？」

従って思わず漏らした呟きに反応する者はいるはずが無く――。

「モモンガ様、武人建御雷様、如何なさいましたか？」

——そんな期待は容易く裏切られる。

いやに謙った姿勢でこちらを伺うのは、あろう事か守護者統括アルベド、NPCだつ

た。

確かに話す、もとい音を発する事は、NPCにも可能だ。雄叫びやフリーズなど、いくつかの音声データは配布されているのだから、プレイヤーの行動を予測してある程度の自動処理化する事は出来る。しかしプレイヤーの言動に合わせた会話などは不可能だ——と、ヘロヘロらプログラマー達が言っていた。

「…GMコールが効き…効かない。何故だか分かるか？」

咄嗟に反応したのはやはりモモンガ。ここは流石ギルドマスターと言うべきか。

対するアルベドは、顔を青くして引き下がる。

「申し訳ございません。無知なる私では「じいえむこーる」なるものにお答えする事が出来ません。この失態を——。」

必死な謝罪をするアルベドを見ながら、武人建御雷はあることに気が付く。

(口が動いている…だと…。)

YUGGDRASILでは表情の変化はない。それは常識だ。明確な異常事態に、言いたいぬ不安に侵されながら成り行きを見守る。

「よい。お前の謝罪を受け入れよう。」

「感謝致します。」

「…セバス！」

「はっー！」

「…ナザリック地下大墳墓を出て周辺地理を確認せよ。知的生物がいた場合、交戦はできる限り避け出来るなら第一層に連れてこい。但し、搜索範囲は周囲1kmに限定する。」

「了解致しました。」

「それと…そうだな。戦闘^{ブレアデス}メイドから一人連れて行け。お前が戦闘に移行した場合撤退させ、速やかに情報を持ち帰らせろ。」

すらすらと淀みなく、まるで台本を読み上げるかの如き流暢さで命令を下すモモンガに、武人武御雷は驚愕を隠し切れない。

「畏まりました。それではこれにて御前、失礼致します。」

「よし、行け。」

「はっー！」

絶対的支配者の命令を受け、見事に一致した歩幅で玉座の間を後にするNPC達を呆然と見送りながら、思わず声が漏れる。

「モモンガさん…。」

「武御雷さん。早急にお話ししたい事があるんですが、よろしいですか？」

振り返ると恐ろしいほど冷静に、そう告げるモモンガ。仲良くゲームをやっていた先

程とは人が変わった様な変化に、怖気にも似た悪寒が背中を走る。

「…あ、ああ。俺は構わない。」

「よかった。アルベド！」

「はっ！」

次いで前に出る守護者統括。その声には先程の後悔は微塵もない。全く後腐れを見せず思考を切り替えるその態度は、まさに優秀な秘書を彷彿とさせた。

「全階層守護者を第六階層、アンファイテートルム円形劇場に集める。時刻は…二時間後でいいだろう。」

「畏まりました。では、第四階層のガルガンチュアも起動させるといふ事でよろしいですか？」

「む…いや、やはり第四のガルガンチュア、第八のヴィクティムは除け。ガルガンチュアは起動にコストがかかる。ヴィクティムは守りの要だ。奴らは余程の事が無い限り動かしたくはない。」

「承知いたしました。それでは復唱致します。第四、第八を除く全階層守護者を二時間後、第六階層アンファイテートルム円形劇場に召集します。」

「よろしい。では、行け。」

「はっ。」

その妖艶な後ろ姿が扉の向こうに消えると、一呼吸置いてモモンガは武人武御雷に向

き直る。何をされるかと一瞬身構えるが、モモンガは言葉を発することなく、見覚えのある一つの指輪を手渡した。

「リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンです。上手く発動するかはわかりませんが、実験も兼ねて円卓の間まで飛ばうと思います。」

そう言い、自分の右手をひらひらと振るモモンガ。その薬指には、先程渡された物と同じ物が光っている。初っ端から身を呈した博打に、苦笑交じりで返す。

「それは危ないんじゃないか?…もし転移座標が適当で壁に埋まつたりなんかしたらどうするよ。」

するとモモンガから意図的に低くした声が届く。

「ここは言わば伏魔殿です。私達に対する監視役で非実態のモンスターがいなくても限りません。今は少なくとも上位者としての立場を剥がされたくはないので、NPC達のない所に行きたいんです。」

もし埋まつたら引っこ抜いて下さい、と笑うモモンガに、引きつりながらも同類の笑顔を見せると、止める間もなくその姿が掻き消える。——と、数秒後、脳内に電話の様な物がかかってくる。

『なんだ…?』

形容し難い感覚に詰まっていると、先の骸骨と同じ声が聴こえた。

『良かった！繋がったみたいですね！これ、〈伝言〉^{メッセージ}です。』

『あ、ああ？なる…ほど。まあ、それじゃひとまずそっちに行くわ。』

『了解です。』

そう言い、脳内の回線が切断された感覚を覚える。一瞬の会話だったが、いつものモモンガだ。ほう、と一息ついた所で思案する。

(指輪、^{これ}どうやって使うんだ?)

~~~~~

「割と時間かかりましたね。どうかしたんですか?」

既に円卓の椅子に座り、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを遊びながらモモンガが尋ねる。

「コンソールも説明書も無いのに、指輪の使い方が分かるわけないだろ…。」

瞬時に使いこなした相手にジト目で返答すると、確かに、とモモンガは呟く。

「天啓ですかね。」

「…地味な助言をする神もいたもんだな。」

「…はい。まあ、取り敢えず座って下さい。色々混乱もあると思いますので。」

「ここは言われたとおり、素直に自分の席に座る。と同時に、心に浮かんだ最たる疑問をぶつける。」

「なんであんた、そんなに冷静で居られるんだ？この状況下だぞ？普通パニックだろ。」

「そもそも自分が混乱状態にある所為か、自然と声が荒ぶる。それを受けて尚、モモンガは平然と、穏やかに返す。」

「精神が…何かに押し付けられている感覚です。激しい感情の起伏はありません。というか、抑制されるんです。」

「—玉座の間で数回ほど発動しました、と付け加えるモモンガ。」

「それって……。」

「恐らくは、アンデッドの特性だと思います。」

「ゲームでのアンデッドとしての特性が、直接身体に響く。それでは…まるで…。」

「…それと、NPC、アルベドとセバスの口が動いていた。ユグドラシルで表情の変化はない。これって…。」

「建御雷さん。あなたの口も動いていますよ。」

「顎を触り、口を動かす。——絶望と共に漏れ出たのは、初めから疑っていた可能性だった。」

「アバターに乗り移った…?」

「奇遇ですね。俺も同じ意見です。根拠はいくつかあります。」

異世界転移。何処の厨二病だ。有り得ない。そう今の状況から目を背けようとする。これはアツプデートなだけで——しかし鼓膜を震わせたのは、残酷なまでの現実だった。

「俺……いや、私。魔法が使えます。」

突然の説明調に、自分が焦っていた事も忘れ、しばし呆気にとられる。

「え……いや、当然だろ。モモンガさんマジック・キヤスター魔法詠唱者なんだから。」

「ああ、そうではないです。……分かるんです。己の持つMP、魔法の効果や範囲、魔法発動の再詠唱時間リキャストタイム。そういった諸々が直感で分かります。」

魔法。そんな物は現実には存在しない。所詮バーチャル仮想空間の中の夢物語だ。人間が切望した、あつたらいいなと言う願いだ。

ユグドラシルでだって、魔法や間合いはゲーム上で見るものだ。決して感じるものではない。

——だが、分かる。そう、意識を向けて分かってしまった。己の中に眠る力。自らの持つ——いや、「武人建御雷」が持つ筈の数々の技が、今や自分自身のものだという事を。納得してしまったことに気付いたのか、モモンガが再び口を開く。

「二段落した所で、一つ聞いてもいいですか？」

「……ああ。」

「武人建御雷さん、貴方は現実向世界こに帰りたいたいですか？」

この瞬間、モモンガの考えている事が嫌でも分かり、背筋が震える。

向こう。確かにモモンガはそう言った。彼は既に腹を括くわっているのだろう。これでも長い付き合いだ。その言い方や雰囲気ふんいきで込められた感情は——たとえば表情が動かなくても——何となく分かる。

最早彼は現実世界リアリティに戻る気はないのだ。

それでもモモンガは、自分が戻りたいと言えば、全力でその方法を探してくれるだろう。そして帰るその瞬間まで、笑っているに違いない。しかしその後は？一人にした事を詫わびながらまた彼を見捨てるのか。

「……………俺も、残ってみようと思う。」

「ホントですか!!」

その驚きのように、余り期待は掛けられていなかったことを悟る。——そして、それに応ずる喜びも。

「…まだこの世界に何かあるかも分からない。一応、帰る方法は探しながら、だけどな。」  
「ええ！勿論です！」

喜色満面の顔——頭骸骨で言われ、武人建御雷も釣られて笑みを浮かべる。——た

だ、未だ気を抜く事は出来ない。

「で、だ。…これからどうする?」

死の支配者のこの答え如何では、武人建御雷も覚悟を決める必要があった。何しろ生者を憎む身体に成り変わったのだ。生物を虐殺します、などと言われたら体を張って止めるしかない。

だがその口から出てきたのは、どこまでもギルドマスターらしい答えだった。

「…まだ使える手足も情報も足りませんので何とも…。…ただ、取り敢えずは水面下で、静かに他のメンバーを探そうと思います。下手に敵を増やしたくはありませんので。」

「…なるほどな…。」

受け身で温厚な、記憶通りのモモンガの性格に、武人建御雷は密かに安堵する。

「…だが、あては? 火力役二人じゃ搜索にはむかんだらう?」

モモンガは、ロールプレイの影響で多少の支援は使えるものの、やはり本職は死霊系続の魔法火力役だ。

加えて武人建御雷も、やはりガチガチの物理火力役である。

二人共、探索や追跡に向いた職業とは言い難い。

だがモモンガは、それさえも冷静に対処してみせる。

「さつき、セバスに外に出る様に命じたのを覚えてますか？」

「ああ、覚えてる。けど、NPCってギルド拠点から外に出られないんじゃないか？」

YUGGDRASILでは、NPCを拠点外に出すことはできない。これは、運営が極端な個人のドリームチーム作成を防いだ為だ。

「ええ。なので、もしもセバスがナザリック地下大墳墓こを出られたら、他のNPC達の力も借りられるはずですよ。そうすれば――」

なるほど、と思う。

確かに、NPC達が外に出られるとなれば、搜索可能範囲は規模が変わる。探知系魔法に特化したニグレドや、多種の魔獣を従えるアウラなどの支援が得られれば格段に効率上がるだろう。

しかし、ここで問題になってくる事がある。

「あいつら――NPC達の忠誠……。さつきの態度もどこまで信用できる？」

疑問を投げられたモモンガも、こればかりはお手上げというポーズを取った。

「わかりません。玉座の間にいたメンバー、アルベドやセバスは先程の態度を見た限りでは安全だと思います。ただ、あれが演技でないかと言われると……」

確証は無いです、と不安げに視線を落とす。

「その為の全階層守護者招集って訳だな。」

ようやく話に付いてきた武人建御雷も、やはり不安の色を隠し切れない。

何しろナザリック地下大墳墓全体が敵に回った場合、相手は百レベルの隙の無い構成十数名、プラス低レベルとはいえ多数のモンスター。百レベルプレイヤー二人に抵抗の余地はない。

「そうです…。ただ、その前に先に六階層守護者の二人にコンタクトを取ろうかと思つてます。」

「六階層…。アウラとマーレか。それはまた何故？」

「……。えーと…。あの二人ならボロを出しても何となく大丈夫そうっていうか…。」

だんだんと言葉尻すぼみになるモモンガに、思わず声を上げて笑う。

「まあ、気持ちちは分かるぞ。モモンガさん。」

支配者の態度として合格に達していなかった場合、アルベドやその他の「賢い」と設定された者達に見捨てられる可能性がある。しかしその点、アウラとマーレであれば、まだ子供なので姿勢を崩し、優しく接した、という苦しい言い訳がギリギリ成り立つ——はずだ。多分。

(見捨てられるだけならまだマシか…。)

下手すれば反旗を翻されかねない。すると行き着く先は——ゲームオーバーだ。

どんどんと悪い方向へ転がっていく思考にブレーキを掛ける意味を込めて、武人建御雷は努めて明るい声を出す。

「まあ、ウジウジと悩んでいても埒が明かねえ。早いところ行こうぜ、アンフィテートルム円形劇場」

「…そうですね。では向こうで会いましょう。」

~~~~~

二人が次に目にしたのは細く、暗い道。ジメツとした空気の蔓延る長い廊下だった。

「転移は成功、と。」

「もう指輪の転移機能は万全と言っても良いでしょうね。」

アンフィテートルム第六回層、森林。その中心たる巨大樹から程近い場所にある唯一の建造物、円形劇場。そこへと続く二本の道の内、出入りが簡単な片方の通路。言わば挑戦者用の出入り口から、二人は来ていた。

特に面白味もない石造りの一本道をしばらく進むと、やがて開けた場所に出る。周りを囲むよう、円状に造られた観客席には所狭しと動く像達ゴレムが並び、頭上には星空が広がっていた。そんな光景に一瞬気を取られ—とその時。

「とあつー！」

掛け声と共に観客席上段から飛び降りる小柄な影。結構な落差があつたにも関わらず、それは膝を軽く曲げるだけで、落下の衝撃を完全に無効化した。

「バムーン」

天真爛漫という言葉が相応しい笑顔と共に、少年の服装をした子供が駆けてくる。

人間のそれよりも長く尖った耳、薄黒い肌。闇森精霊ダークエルフの少女は、上下共に革鎧の上から赤黒い竜王鱗を貼り付けた軽装鎧を纏っている。その上に羽織ったベストの胸の部分には、アインズ・ウール・ゴウンのギルドサインが輝いている。

「モモンガ様！それに武人建御雷様も！わたしの守護階層までようこそ！」

予想していたよりもフレンドリーな、明るい少女の出迎えを受け、上位者二人も相好を崩す。

「おう！久しぶりだな、アウラ。」

「今日は少しだけ邪魔するが、構わんなかな？」

「邪魔だなんてとんでもない！至高の御方々はナザリックの絶対支配者ですよ？」

「そういうものか……？」

戯れつく子犬の様な雰囲気のアウラをしばしの間眺めていると、モモンガがふと何かに気づいた様に顔を上げる。

「ところろで……」

そんなモモンガの様子をいち早く察知し、含まれた意図を理解したのであろう。瞬く間に猛犬と化したアウラが勢いよく振り返った。

「マーレっ！早く飛び降りなさい！至高の御方々をお待たせする気だ！」

すると観客席の方から、糸のようにか細い声か風に乗って聞こえてくる。この距離で聞こえるのは奇跡とでも言うべき小ささだが、不思議とはつきり聞き取れるのは、マジックアイテムのお陰だ。

「む、無理だお…お姉ちゃん…。」

「つべこべ言わない！」

「わ、分かったよお…。え、えい！」

着地の際に少しだけよろけたが、そのままテツテツテ、という擬態語が相応しい走り方で駆けてくる。アウラとは天と地程の差があるものの、その者もやはり、落下の衝撃を受けた様子は見せない。走る風でスカートがヒラヒラと揺れるが、見えそうで見えない、などと支配者達が思っている事は誰も知らぬ事である。

「お、お待たせしました。モモンガ様、武人建御雷様。」

姉と同じくオッドアイの上目遣いでオドオドと話しかけるのは、アウラの弟にして同じく第六階層守護者、マーレ・ペロ・フィオーレだ。

アウラが少年、対するマーレが少女の格好をしているのは手違いでも何でもなく、た

だこの双子を創った人物がそう設定したに過ぎない。

「ところで、今日はどんなご要件でいらつしやったのですか？」

「ふむ、そうだな…。実験、と言った所か。」

「じ、実験、ですか？」

不思議そうな二人に対し、モモンガは自身の手に収まる金色の杖を軽く振ることで答えとする。

「そう、こいつの、な。」

「そ、それは！」

「ま、まさか、モモンガ様しか触る事が許されていないという、で、伝説のアレですか？」
「そうだ。これが…これこそが我々全員で作り上げた、最高位のギルド武器。スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンだ。」

伝説のアレ、とはどういう意味なのか考え物だが、双子の心からの敬意と称賛に気を良くしたのか、いつもは冷静なモモンガは、嬉々としてスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンについて語り始める。

「スタッフの七匹の蛇が啜える宝石はそれぞれが神話級^{ゴツズ}アーティファクト。シリーズアイテムである為に、全てを揃えることよってより強大な力が引き出されている。これらを全て集めるには、多大な努力と多大な時間を費やさなければならぬ。実際、私達

の間でもやめようという意見が出た事が数え切れない程あった。どれ程ドロップするモンスターを狩り続けた事か……。そして更に、このスタツフ本体に込められた力も神話級を超越し、かの世界級アイテムに匹敵するレベルだ。特に凄いのは組み込まれた自動迎撃システ——」

「はい、そこまで。」

ずつと脇で静観していたが、ヒートアップしたモモンガを止められるのは自分しかない」と理解し、武人建御雷は苦笑混じりにモモンガの肩に手を置く。

「モモンガさん、ちよつと熱くなり過ぎ。」

「う、あ……。：ゴホン。ま、まあ、そんな訳だ。」

「す、凄いです！」

「凄いです！モモンガ様！」

長つたらしい自慢話に飽きる事もなく、キラキラと純粋な目を輝かせる双子に、武人建御雷はやはり子供は可愛いなく、などと思う。

「よし。そんな訳でこのスタツフの実験をしたいのだ。色々準備をしてもらえるか？アウラ？」

「はい！ただ今！」

そうして持つてこられたのは、なんの変哲もない計五体の藁人形達。魔法の実験と言う事も鑑みて、範囲攻撃魔法対策にある程度の間隔を開けて置いてある。

そんな人形達に指を向け、モモンガは力ある言葉を紡いだ。そして放たれたのは第三位階の魔法。

「ファイアーボール火球」

突き付けられた指から拳大の火の玉が宙を翔け——着弾。

封じられていた熱と炎が暴走し、目標周辺を嘗め尽くす。

「ふっ、フフフツ……」

何が琴線に触れたのか、怪しげな含み笑いをするモモンガ。そんな様子を武人建御雷と階層守護者は不思議そうに見つめる。

一瞬で炭化した人形を横目にブラブラと歩きながら、モモンガは再び魔法を使う。

「マキシマイズマジック魔法最強化・オバーム焼夷」

低位階ではあるが、最強化を施された効果範囲の広い火属性魔法に、三体の藁人形が刹那の間で完全に破壊される。

「完璧だ。」

充足感に満ち足りた声でモモンガが呟く。

「どうだよ、モモンガさん。魔法の力を手に入れた感想は？」

武人建御雷はモモンガの側に寄ると、アウラ達に聞こえない程度の声で話しかける。「最高に満足です。ユグドラシルでの魔法が全て自在に行使できると思うと思わず笑っちゃいますね。」

「…そうやってクツクツ笑われると、この上なく邪悪に見えるんだが…。まあいい。で、実験の方は？」

「全く問題ないです。MP消費、冷却時間リキヤストタイム、魔法強化系の特殊技術スキルも何らユグドラシルと変わらないですね。」

「そいつは良かった。にしても、こんな事になるんだったら俺もベルリバーみたい魔法職取つとけば良かったな。」

魔法を使いつつ戦士として戦う、器用貧乏と称された友人に対する、武人建御雷のそんな羨望のボヤキは、いつの間にか隣にいた野伏レンジャーの少女にしっかりと聞き取られていた。

「武人建御雷様も魔法を使ってみたいんですか？」

思わぬところからの質問に、武人建御雷はしどろもどろになりながら応対する。

「あ、ああ。まあ、そんな所だな。…魔法が使えたら、もつと色んな戦い方が出来るんじゃないかと思つてな。」

「武人建御雷様は今でも十分お強いじゃないですか。」

そんな子供の素朴な疑問に対し、武人建御雷は嗚呼、と思う。「いや、俺なんてまだまだ弱っちいさ。あいつに比べたらな。」

思い返してみれば、ユグドラシルを続けていたのもそれが理由だったのかも知れない。かつて自分がその強さに惚れ込み、同行する事を希望した人物。それから挑み負ける度、何度も己の刀を鍛え直し、それでも勝てなかつたあの人。そして手が届く前に自分の前から居なくなつてしまつた、喪失感。

「…やるべき事、か。」

武人建御雷は密かに決心する。——この世界の何処かに居るかもしれない、奴を倒せるまで強くなろう、と。

そして暫く瞑つた目を開くと、突然黙り込んだ武人建御雷を不思議そうに見つめるアウラに笑いかける。

「男の浪漫だよ。」

ら慄く。

「……自分の強さを掴んだからっていきなり宣戦^v布告^pか……。戦闘^v狂^pめ……。」「

冗談めかした武人建御雷の言葉に、モモンガも笑いながら答える。

「俺は戦いませんよ！どのみち武御雷さんみたいな熟練戦士職相手じゃ、一気に詰められて終了です。……そうじゃなくて、剣を振る相手が藁人形じゃつまらないでしょう？」

「まあ、確かにそれもそうだが。」

「それに建御雷さん、30レベル位の雑魚じゃ満足いく手応えないでしょう？」

「……確かに特殊^ス技術^キこみの戦闘なら70レベル相当の体力は欲しいな。」

攻撃力重視でビルドを組んでいる武人建御雷からすれば、50レベル以下の敵など相手では無い。ソロとはいえ、最低でも60レベル位の平均的な体力を持つていなければ、特殊^ス技術^キの初コンボに耐えられないだろう。

つまり体力多めのタコ殴りに出来るサンドバッグをくれ、と言ったつもりだったのだが……。

「そうですね。それじゃあ……へー根源の火精霊召喚《サモン・プライマル・ファイヤーエレメンタル》」

モモンガの言葉に合わせ、突き付けられたスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウ

ンに組み込まれた宝玉の一つ、紅い珠がその力を發揮せんと光り輝く。

すると、唯一残っていた未だ破壊されていない藁人形を中心に炎の豪風が巻き起る。それに伴い、炭と化していた人形達は問答無用とばかりに四散させられる。

熱風が過ぎ去った後、そこに居たのは人型をとる異様な巨体だった。

ブライマル・ブライエ・エレメンタル
根源の火精霊

Y U G G D R A S I L の精霊種エレメンタルにおいて、根源は、ブライマルアイテムで召喚出来る中では最高位のものだ。その中でも火精霊はその名の通り火に関する特殊技術ススキルを数多く保有している。それに加え、存在するだけで周囲に火炎の継続ダメージを負わせる能力を持つ、精霊にしては珍しい物理攻撃系のモンスターとして有名だ。

そんなモンスターを前にし、武人建御雷は思わず顔が引きつる。

「……結構ガチな奴出してくるな……。」

半巨人ネファイリムの種族そのものは物理防御値に対し、魔法防御値が高いとは言えない。武人建御雷もその装備によって防御値をかなり上げてはいるが、やはり魔法に対しては完全耐性からは程遠い所だ。

しかも所持している装備から、相性が悪くないが良くもない火属性を選択してくる辺り、モモンガの悪戯心(?)が滲み出ている。

(…継続ダメージは鎧でカット出来る。第六位階以下の魔法も特殊技術ススキルで無効化。第七

位階以上で警戒するとしたら、^{ヘルレイム}〈獄炎〉位か…。武器は俺が持つてるこれしか無いからな…。)

「あれ、これどうやって動かせばいいんだ？」

どうやって倒そうかとあれこれ思案していると、モモンガが不思議そうな声を上げる。

「どうした？」

「召喚獣の使役ってどうやるのかなって思いました。」

「ん、それなら適任が居るじゃねえか。」

そう言って示すのは双子の姉。多数の魔獣を従えるティマーの彼女ならば、適当なアドバイスをくれるだろう。

と、そこは流石階層守護者。自分へと意識が向けられているのを理解したのだろう、既に手招きで呼べる位に近付いていた。

「アウラ、ちよつといいか？」

「はい！どうかしたんですか？」

「お前は魔獣とどうやってコミュニケーションをとってるんだ？」

うーん、と考える素振りをするアウラ。数秒の後、おずおずと口を開く。

「特にこれと言うものはないんですけど、何となく気持ちが分かるんですよね。それで

念じて、やって欲しい事を伝える、みたいな感じですよ。」

「なるほどな。だとき、モモンガさん。」

結果、得られたのは何とも漠然とした回答だったが、まあ物は試しだ。やってみろ、と手で急かす。

「……建御雷さんを攻撃しろ。」

と、その瞬間。

「ごはっ!」

すんでの所で刀の鞘を間に挟み、直接的なダメージは防いだものの、衝撃に耐えられず二転、三転と地面を転がる。

「武人建御雷様!大丈夫ですか!」

「……クソツタレが……。」

「ヤバ、建御雷さん怒らせた……。」

完全な不意打ちに、そこそこの怒りを感じながらゆらりと立ち上がる。

戦闘開始だ。

「デカブツが。掛かってこいよ、叩き潰してやる。ヘナイト・チャレンジ」

1 vs 1の時は特に意味はない——ヘイト値によって威力が変わる攻撃もあるが、武人建御雷は持っていない——が、ユグドラシルと同じ様な流れを作る為に、ヘイト上昇値が

二乗になるスキルを使用する。いわゆるルーティーン、と言う奴だ。

ところがその甲斐あってか、様子見のつもりか立ち止まっていた根源の火精霊ファイヤール・ファイヤーエレメンタルは、唸りを上げて猛進を開始する。

己の得物を正眼に構え、半身で突っ込んでくる精霊を見つめる。刀が羽のように軽く感じられるのは、肉体の筋力が優れているからか。

(あの速度でまともに殴られたら生きてられる気がしないんだが…。)

半巨人ネファイリムの体は大丈夫なのかも知れないが、人間としての精神は今にも腰を抜かしそう
だ。

だが、そんなみつともない事出来る筈もない。

(これは示威行為デモンストレーション…それに、今の俺は武人建御雷、アインズ・ウール・ゴウンのサムライだ。集中しろ…。)

そんなことを考えている間にも、根源プライマル・ファイヤーエレメンタルの火精霊は歩を止めることなく、すぐ目前にまで迫ってきている。

精霊が右拳を引き、撃ち出す。

フェイントも何もない、ただその体躯に物を言わせただけの単純な正拳突き。

しかし、そこに込められた力は尋常ではない。

武人建御雷が数瞬間に立っていた空間を、豪風を伴った圧倒的な力が通り過ぎる。

(スピードは想定内。だが力はユグドラシルと比べて大分派手に感じるな。)

ユグドラシルでは、直接風を起こすようなアイテムや攻撃をしない限りは、風は吹いたりしない。たとえあつたとしても、触覚が制限されている中では無用の長物だっただろう。

流れるような動きで右に回り込むと、体勢を崩した精霊に向かつて、浅く切りつける。だがその動きを予想していたのか、思いの外機敏な動きで回避される。

「ほう、なかなかやるな。」

愚鈍な突進から、単なるでくの坊かと思っていたがどうもそうでは無い様だ。

まるでプレイヤーを相手にしている様な感覚に、武人建御雷は警戒レベルを1段階引き上げ、次なる攻撃に備える。

精霊が再び突進を敢行するのに合わせ、取ったのは居合の型。振り下ろされた特大サイズの拳を、突き出した刀の柄で受け――

(軽い!)

「グッ……!」

つまり叩き付けはフェイントで、本命はその後。

慌てて引き戻した刀はギリギリ間に合い、横から来た反対の腕を弾く。なんとか初撃同様、ダメージを緩和する事に成功した。だがやはり、伝わってくる衝撃は消し切れず、

腕に痺れを残していく。

(ちくしよー……。完全に腕が鈍ってるな……)

全盛期であれば予測は愚か、転じて攻撃も出来たであろう一撃を受けてしまった事に、苛立ちを覚える。

だが少しずつではあるが、感覚を取り戻している事も確かだ。

「そろそろ——」

言いかけて、心配はしてくれているらしいギルドマスターの声が重なる。

「——防戦一方ですけど大丈夫ですか？ 必要なら支援魔法かけますよ！」

「大丈夫だ！ 問題ない！……ここっからが本番だ。」

かなり大振りの攻撃を弾かれた為か、態勢を崩していたプライマル・ファイヤーエレメンタルの火精霊。

その巨体が完全に姿勢を整えたのを確認し、武人建御雷は刀を腰に佩いたまま走り出す。

先程とは変わり、今度は精霊が待ちの姿勢だ。

(……一瞬置いて……ココだ！)

相手の間合いに入った瞬間、袈裟斬りとばかりに斜めに振り降ろされた拳を、懐に入り込むことで回避する。よもや接近してくると思っていなかったであろう精霊の動きは、鈍い。

今のは近接戦に慣れた者しか出来ない、見事な回避だろう、と口には出さないが自負する。

「四方八方」

すれ違いざまに、連続した斬撃ダメージを与える特殊技術スキルを使用し、そのまま後ろに切り抜く。ぶっつけ本番の特殊技術スキル使用ではあったが、筆舌に尽くし難い素晴らしい感覚だ。使った瞬間の、湧き上がる力と高揚感。

「この力……マジで俺のものなのか……。これなら……！」

「不動明王撃・不動絹索」

確かな自信と共に、振り返りつつ膝をついた精霊に対し、切り札とも言える五大明王撃のコンボの初手を叩き込む。

発動と同時に、巨大な影が根源プライマル・ファイヤーエレメンタルの火精霊を覆う。

「こうして見ると凄え迫力だな……。」

武人建御雷の十倍はあろうかという巨体をもつ不動明王が出現した。するとその手に納められていた絹索がひとりでに動き、精霊を縛る。

二つある不動明王撃のうち、「不動絹索」は敵の回避率を著しく減少させる技だ。カルマ値が低い程効果があるこの技は、本来仲間を対象のカルマ値を弄ってもらってから使うのだが、無いものを嘆いても仕方がない。

現に、精霊の動きは目に見えて落ちていく。

「おお……。見ていろ、アウラ、マーレ。ここからが建御雷さんの切り札だ。」

どこかから聞こえるそんな声に笑みを零すと、間髪を入れず次なる攻撃に移る。

トライローキウイジヤヤ
 「降三世明王撃」

不動明王とは似て非なる明王、降三世明王が出現する。保持しているのは、その巨体に見合った巨大な戦槍だ。

「おおおあー」

刀を全力で振り下ろし——空を斬る。

するとそれを合図に、降三世明王は槍を構え——

豪風が巻き起こった。

「派手過ぎるだろ……。」

突き出された槍は、動きの鈍った根源ブライマル・ファイヤーエレメントの火精霊を貫通し、背後の地面にクレ

ターを作るまでに至っていた。

事の犯人降三世明王は、役目は果たしたと言わんばかりにその巨体を虚空に消す。

「これがゲームと現実との差、か……。」

ユグドラシルでは個体が対象の技の影響で、フィールドに変化を及ぼす、などという事は無かった。だが確かに現実ではそうは行かないだろう。当たる当たらないに関わ

らず、殴れば凹むし切れば削れる。

ただ、一度こうなってしまうてはもうヤケだ。

「〈大威徳明王撃〉〈軍荼利明王撃〉」

大威徳明王がやはり巨大な棍棒で、潰そうとするかの如く苛烈に精霊を叩きのめす。

軍荼利明王はその手に従える蛇をけしかけ、不動明王撃の効果が切れた精霊を再び封じ込める。

ことが終わり煙が晴れたそこには、なだらかだった筈の大地に倒れたまま、移動阻害
ブライマル・ファイヤーエレメンタル
 によつて身動きが取れなくなっている根源の火精霊がいた。

「……何か……虐めの首謀者の気分だ……。」

いくら実験とはいえ、多数の明王で袋叩きにした事に申し訳ない気分になりながら、
 五大明王撃最後の一撃を発動させる。

「〈金剛夜叉明王撃〉」

今回出現したのは、これまでの明王達とは風格を違えた一回り大きな明王。その手に持つのは例に漏れず巨大な金剛杵。だがそれもただの金属の棒であるはずがなく、雷撃を纏った一際攻撃的な金棒だ。

「終了だな。」

存在を確認した武人建御雷は再び刀を振るう。

同時に金剛夜叉明王も、刀の軌道をトレースしたかのようにその得物を横薙ぎに殴りつける。金剛杵の衝撃によって大きくノックバックを受けた根源プライマル・ファイヤーエレメンタルの火精霊に、雷撃が纏わりつき更なるダメージを与える。

しかしそれだけでは終わらない。

さらに、精霊を取り囲むように再び不動明王、降三世明王、大威徳明王、軍荼利明王が出現する。五体の明王達が仁王立ちで囲む様は正に圧巻。睨みつけるような形相を崩す事なく、それぞれが虚空から鎖を取り出すと、その一端を精霊に投げつける。

これが俗に言う五大明王コンボの真骨頂、行動の完全阻害である。これは移動阻害に対する完全耐性をも突き抜けることが出来、その間に莫大なダメージを与えることができる、という技だ。

〔風斬〕〔四方八方〕〔スマイト・フロスト・バーン〕

五大明王コンボによって完全に動きを止められた精霊に対し、再詠唱時間リキャストタイムの長い大技を叩き込む。

先程使った〔四方八方〕に加え、攻撃の威力及び速度が上昇する〔風斬〕、攻撃に氷の属性を付与し、なおかつ追加の属性ダメージを与える〔スマイト・フロスト・バーン〕を使用する。

本来ならばここに、効果対象が多い程攻撃力が上がる〔羅刹〕や弱体効果デバフを付与する

特殊技術スキテクニクを上乗せするのだが、根源プライマル・ファイヤーエレメンタルの火精靈の残体力的に考えて、もう今は必要ないだろう。

ゴオオオオ——と音を立てて火柱が立つ。

数刻の後、それが消えた後には何も残っていなかった。

「お見事です。建御雷さん。」

「ホントにカツコ良かったです！」

「す、凄かったです！」

戦闘態勢を解き、観戦者達のもとへ歩み寄ると、口々に賞賛の声が掛けられる。

「おう、ありがとよ！」

「一応ポーション使つといて下さい。効くかどうかの確認も兼ねて。」

そう言つて手渡されるのは血のような色をした、マイナー・ヒーリング・ポーション下級治癒薬。ユグドラシルに

て、序盤の内からかなりお世話になる、一般的な治癒の薬だ。だが、武人建御雷はある事に疑問を抱く。

「何でモモンガさんがマイナー・ヒーリング・ポーション下級治癒薬なんて持つてるんだ？ アンデッドにとっては毒だろうに。」

武人建御雷が負の属性を持つものによつてダメージを受けるように、負の生命であるアンデッドは、治癒の力でダメージを受ける。——因みにアンデッドが回復を凶るとき

には負属性の魔法やアイテムを自身に施す——従ってモモンガには不要なアイテムの筈だ。

「いえ、俺貧乏性でして。売ろうに売れないんですよね、こういう消費系のアイテム。それに、

他の人にはちゃんと回復薬として働きますし。」

「それ、物凄い量あるんじゃない？……？」

序盤から入手出来る薬を捨てても使いもせずにとっている、それが本当だとすれば、総数はどれ程のものか。

「マナー・ヒーリング・ポーション下級治癒薬だけで、一万回死にかけても問題は無いです。」

微笑んで発せられたセリフにひとしきり笑ったあと、ようやく先程の戦闘が一応実験も兼ねていたという事を思い出す。

「あ、そうそう。特殊技術スは最高だったぜ。」

「と言うと？」

「なんと言うかなあ……。隠れてた力が湧き出て来た、みたいな感じか？」

「ああ、分かります。魔法を使用する時、俺も似た感情になりますよ。」

現実世界では持ち得ぬ力に、二人の上位者が、冷めやらぬ興奮に身を任せ話し込んでいると、アウラがおずおずと疑念の声を上げる。

「あの、モモンガ様も、武人建御雷様も、昔から魔法や特殊^ス技術^{キル}は使えていましたよね……?」

冷や汗が背中を伝う。双子の守護者を、完全に仲^{ギルドメンバ}間と見做して話をしていた。事前に、アウラとマールレに対する示威行為であると伝えられたにも関わらず――。

思わずモモンガを横目で盗み見ると、失策の為震えているようにも見えてくる。誤魔化そうと慌てて台詞を考えるも、焦った頭は空回りするばかりで何も浮かばない。だがそんな中モモンガは、いとも冷静に告げる。

「ああ、詳細は各守護者達が集まった時に伝える。今は、我々は未曾有の危機に晒されている、とだけ言っておこう。」

「え、えええーそ、それって大丈夫なんですか?」

予想だにしていなかった事実を告げられ、マールレが大慌てで叫ぶと、アウラも驚愕に彩られた顔で何度も頷く。だがモモンガは努めて優しい声を作ると、双子に言い聞かせるように話す。

「ああ。安心しろ。私達がいる間は、このナザリックに被害は及ばせない。」

それを聞くと、二人は安堵と同時に不思議な表情を浮かべる。一方武人建御雷は、言葉少ない会話の中でも絶妙な布石を打つモモンガの話術に、驚愕を隠しきれないでいた。

「だから心配する必要は無いぞ、アウラ、マール。」

「あたし達、守護者なのに……。何も出来ないなんて……。」

「そう畏まるな。お前達守護者は仲間達の遺した宝。傷を付けられてたまるものか。」

シモベとしての責任を感じているらしいアウラ達に対し、モモンガはどこまでも優しく語りかける。

「待て、誰か来たぞ。」

一部始終を、モモンガさんつて案外子供の扱いに長けているんだな、などと思いつながら聞いていた武人建御雷。しかし、自身のアイテムの効果でこの円形劇場に転移してアンファイテアトルムくる存在を知覚したため、念を入れて会話に割って入る。

「転移魔法なら……。シヤルティアですね。」

先程の無邪気な様子とは一変、吐き捨てるような冷たい口調でアウラが呟く。

それとほぼ同時。テンションの落差に瞠目する暇もなく、モモンガから然程離れない距離。そこにのっぺりという擬態語が相応しい、楕円の下半分を切り取ったような闇が出現する。

そこからずるりと出てきたのは、正に美の結晶と言っても過言ではない、可憐な少女だ。

「ご機嫌麗しゆう、モモンガ様。それに——武人建御雷様！お帰りになりんしたんであ

りんすね！」

「お前もな、シャルティア。」

「おう！帰ってきたぜ。」

体をくねらせながらモモンガに近づくとその姿は、見た目の年齢とはそぐわず、ちぐはぐで可愛らしささえある。だがそれでも、女性経験の少ないであろうモモンガには十分だったのか、骸骨の頭部を若干引いている。

（アイツ、死体愛好癖も盛ってたのか…。それより、シャルティアの目が一番怖いんだが…………。）

まるで蛇が獲物に狙いを定めているような、そんな雰囲気を感じた。モモンガを一心に見据え、逃さない様にロックオンしているようにも見えてくる。実際そうならぬのは、本人が必死に抑えている為か、はたまた自分がいるので遠慮しているのか。

「くや…………。」

シャルティアとすれ違った瞬間、アウラが眩く。アンデッドである為、屍臭でもするのかと思つたが、その理由はシャルティアが近くに来た時に分かる。

（きつつい香水使つてんな…………。）

創造主は何をしたかつたんだ、と頭を抱えなくなるが、それも無理は無いだらう。

エロゲー・イズ・マイライフを豪語する男が自分の趣味思考をこれでもかと注ぎ込み、

そうして創られたのがこのダメ美少女、シャルティア・ブラッドフォールンなのだから。だが、次に続いた、アンデッドだから腐ってるんじゃない？と言う発言は、シャルティアも見逃す事が出来なかつたようだ。

「それは不味いでありんしょう。モモンガ様もアンデッドなのだから。」

「いや、モモンガさん骸骨だから体臭とか無いだろ……。」

自分の腕を持ち上げ、臭いを嗅いでいるモモンガを見て、思わず突っ込んでしまう。しかしアウラの反論は、更に斜め上を行く。

「はあ？モモンガ様が単なるアンデッドなわけ無いじゃん。多分超^{スーパー}アンデッドとか神^{ゴッド}アンデッドだと思っけど。」

ああ、とかうん、とか納得の声が聞こえる中、再び突っ込もうとするが、第三者の乱入によって止められる。

「オオ！武人建御雷様ッ！」

人では無い者が無理矢理人を真似た様な声。その発生源は――

「…よう！久しぶりだな、コキュートス。元気だったか？」

「ハッ！日々、鍛錬ヲ積ミ重ネテ参リマシタ。」

ゴオオ、と吐く息は極寒の冷気を以て、ダイヤモンドダストを作り出す。

自分と同じ、武人というコンセプトで創り出した階層守護者、コキュートス。第五階

層、氷河の護り手だ。蟻と蠅螂を融合させたような体の背には、あたかも氷山のような突起が複数並んでいる。人の首ほどはあろうかという四本の太い腕は、二本で白銀のハルバード、残りの二本で、それぞれメイスとブロードソードを保持していた。

「そうか。それは良い事だ。何事も続けていくのは大事な事だからな。」

「ハッ！」

守護者達の声は設定出来るものではない。だが、全員が想像と似た声を発する事に、武人建御雷は一人苦笑する。脳内声優なるものについて語っていたのは、たしかペロロンチーノだったか。

そんな事を考えている間にも、来訪者は続々とやってくる。

「皆様、お待たせ致しました…ッ！武人建御雷様！御帰還なされたのですか！」

「おう！デミウルゴスか。…ウルベルトの創ったまんまだな。昔を思い出すぜ。」

「よく来た、デミウルゴス。それにアルベド。」

頂点たるモモンガからの労いに、興奮冷めやらぬデミウルゴスも一時的に冷静さを取り戻し、アルベドと共に並ぶ。

「至高の御方の命令とあらば、即座に。」

「有難う御座います。ですが、労われる程の事はしておりません。」

「そうか…。」

全階層を渡り歩いたのだから、そこそこの仕事ではあるだろうと思うが、モモンガも了承の言葉以外言いそうにないので、コメントは自重する。

全員が揃った事で、守護者達の雰囲気が一変する。

何事かと身構える武人建御雷とモモンガ。

そんな中、アルベドのみが一步前に入る。

「では皆、至高の御方々に忠誠の儀を。」